

伊予の戦国時代哀史



河野氏滅亡と 周辺の武将たち

室町幕府の政治力が地に落ち、諸国には群雄が割拠した戦国時代——

「腕一つで天下取り」を夢見て、互いに鎬を削り合う中で……

名族河野氏の哀史はどう展開したか



—— 伊予の戦国時代哀史 ——

河野氏滅亡と周辺の武将たち

別府頼雄

目

次

まえがき

一、長宗我部元親の誕生……	9
二、土佐の出来人元親……	17
三、岡豊城と長宗我部元親……	30
四、織田信長と長宗我部元親……	36
五、長宗我部元親の伊予侵入……	44
六、天下布武を賭けた織田信長……	50
七、本能寺の変と長宗我部元親……	64
八、河野氏元親軍に降伏説の謎……	78
九、伊予河野氏の出自と盛衰……	84
一〇、四国征伐軍と長宗我部元親……	95

一一、浮嶋神社兵燹説の虚構……………	102
一二、湯築城の降伏と小早川隆景……………	114
一三、湯築落城後の河野家一統……………	132
一四、三原八幡藪事件の謎……………	143
一五、河野家遺臣たちの動静……………	151
河野家分限録……………	161
土佐の名族……………	164
伊予の名族……………	169
年譜……………	176
参考文献……………	182
あとがき……………	

まえがき

足利幕府の政治力が地に落ちて、諸国に群雄が割拠した戦国時代と呼ばれた戦乱の世はおよそ百年間も続いたのであるから、この時代に生まれ合わせた人たちはどう生き抜いたのであろうか。

この時代に約百五十名にのぼる戦国大名が出現しているので、まさに乱立状態である。「腕一つで天下取りを」と互いに鎬しのぎを削って戦い、弱者が滅び強者が生き残って、歴史上に花を咲かせたのである。

戦国時代——というとき直ぐ思い浮かぶのがあの桶狭間の戦いである。永禄三年（一五六〇）の五月、尾張に侵攻してきた「海道一の弓取り」と呼ばれた今川義元の率いる二万五千の大軍を、「尾張のたわけ」と蔑さげすまれた青年武将織田信長が、わずか二千の軍勢で

突入撃破したのであるから吃驚仰天である。歴史に興味をもつ者が関心を持つのは至極当然であろう。戦国時代というのは、こうした意外性をはらんだドラマが数多く展開しているので興味津津たるものがある。

このような時代を駆けめぐるリーダーとなる武将たちの知謀・戦略・戦術といったものは種々様々であって、歴史のおもしろさを一層高めているのである。戦国時代こそ躍動感に満ちあふれた時代といえよう。腕一つで一国一城の主になれる可能性が、富籤とみくじを買う興味に似た夢をもつことが出来たのかも知れない。日常茶飯事に殺し合いが行われたので悲惨な光景を目のあたりにすることも少なくなかったであろうが、経済が活性化して庶民は生き生きとして生活したという側面もあったのである。

少年の頃、『新編温泉郡誌』を見て、戦国時代に土佐の豪族長宗我部元親が郷土に乱入したということを知って以来、心の一隅に長宗我部元親に対して憎しみと恐れを抱いていたように思う。本書を纏めようと思いついたのも、それが一つの動機になっていることは否めないが、伊予における戦国時代の最後の幕引きとなった湯築城の落城は関心の最大事

であった。

伊予の武將たちも人それぞれに秘策をつくしたであろう。謀略に賭ける者もあれば、世の中の動きの認識のあまさから自滅を早めた武將など、運不運が錯綜する中で一大ドラマが展開しているのである。名族河野氏の滅亡にかかわる哀史を、その周辺で関わりある武將たちの動向を織り混ぜながら、その顛末を綴ってみることとする。

平成九年七月十日

一、長宗我部元親の誕生

四国全土の制覇を企てて周辺の豪族たちを次々と滅亡させて震いあがらせた土佐の長宗我部元親は、天文八年（一五三九）に長岡郡の岡豊城で、城主長宗我部国親の嫡男として呱呱の声を上げたのである。

その土佐国は、前面は宏大な太平洋が開け背後は高い四国山脈が閉ざしている蔽しい自然環境となっている。そのため古代より「流刑の地」に相応しい国とされてきた。古代より中世にかけて名のある流人だけでも、万葉の歌人石上乙麻呂を始め、池田親王、弓削淨人、紀夏井、菅原道真の子高視、左大臣藤原頼長の子師長、源頼朝の弟希義、僧顯真、法然上人、土御門上皇、尊良親王等七十五人の名が記録されている。

日本の古典である『古事記』に、「土佐国は建依別と謂ふ」とあって、土佐国は太平洋

蘇我臣そがおみの配下たりし宗我部そかべの裔にして蘇我部の条に云ひたるが如く、土佐国には香美郡の宗我部と長岡郡の宗我部とありしにより、後世郡名を採りて前者を香宗我部と云ひ、後者を長宗我部と称す。即ち長宗我部とは長岡郡の曾我部の意たるなり。

と述べており、蘇我氏の部民の出自であるとしているが、その根拠となる資料のことは何も示していないのである。

そこで、『群書類従系図部集』の「長宗我部系図」を見ると、

家伝に云う。秦河勝はたのかわかつの後裔なり。子孫世々土佐に住す。家紋は鳩酸草かたばみなり。(原漢文)とある。さらに長宗我部元親の家臣高島孫右衛門の著書『元親記』を開いて見ると、

元祖は大唐人、秦始皇しんのしこう六代の孫の流なり。日本に渡海し初め信濃国に住す。この人、文に達し武に勝れ連々叡聞あり。人王十四代仲哀天皇の御宇、召して上洛せしむ。詔ありて大学寮にて先ず儒才の献策作文を試みらる。尤も叡感あり。この時秦氏を号せられ畢おわんぬ。(原漢文)

とあるので、以上を総合して考察すると、長宗我部氏の出自は「秦はたし氏の子孫」であると

するのが妥当であろう。

なお、現在高知県南国市の下田三所権現さんしょこんげんに残っている棟札に、

権現天文廿三甲寅六月十五日 大檀主秦国親同口親。

とあり、さらに長岡郡大豊町の豊楽寺の棟札にも、

豊楽寺御堂 檀那長宗我部秦。元親本願豊永貞資天正五丁丑霜月八日。

とあり、長宗我部国親・元親父子は共に「秦氏」を名乗っているので「秦氏の子孫」であるという強い意識をもっていたことは明らかである。

秦氏の土佐入国については『長元記』に、「秦河勝の末葉当国の国司を賜ふ」とあり、また、『土佐国竊簡集』とくわんしんじゅう巻三所収の「長宗我部系図序」にも、ほぼ前書と同様のことが書いてあるので、長宗我部氏は初め国司として入部したが、後に土着したものであろう。

なお、伊勢国桑名より土佐国へ入り、初めは長岡郡本山に住んでいたが、後に岡豊の郷民たちに招かれて移り住んだという説がある。山本大氏たけしは「長宗我部という苗字の由来を考えた場合、鎌倉時代の初期信濃国から土佐国に移って来た地頭クラスの豪族であるとい

う説は肯定してよいだろう」と述べている。

つまり、治承四年（一一八〇）に長宗我部氏は香美郡司に扈從こじやうして源希義の挙兵に参加し、平氏と戦った時に戦功があつて、源頼朝から香美・長岡二郡の地頭職に補任されたと推定しているのである。地頭職に補任された長宗我部氏は「かたばみ」の家紋を旗印に勢力を伸ばし、岡豊山（高知県南国市）に居城を構えてからめきめきと頭角を現わしていた。

南北朝時代には足利尊氏に属して第十一代信能のぶよしは戦功を挙げて恩賞を受けている。諸国の守護は各地で勢力を伸ばし、地頭や地方豪族を従えて大名化していったが、管領の細川氏も守護大名として近畿・山陽・四国で七カ国を支配したが、土佐国もその一つであった。康暦二年（一三八〇）に細川頼益が守護代として入国し香美郡田村荘に居館を構えた。そのあと満益・持益・勝益と四代にわたって土佐国の地頭や豪族たちを支配してきたのである。

この間にあって長宗我部氏は第十二代の兼能かねよしが管領細川氏の命を受けて貞和年間（一三

四五〇）に吸江庵を建てて、その寺奉行になって以来、代々これを受け継いで管領の細川政元の庇護を受け権勢を伸ばしていった。『土佐物語』に、第十九代兼序について、武勇才幹衆に越え大敵を見ては欺き、小敵を侮らず寡をもって衆に勝ち、柔をもって堅を挫くこと孫呉が妙術を得たる大將。

と評しているが、この長宗我部氏に対して憎み不安を抱く者も少なくなかったのである。永正元年（一五〇四）、長宗我部元親は吉良・森氏らの国人衆の支持を得て、土佐国土佐郡の鴨部神社を再建して結束を固めていたが、香美郡の山田氏とは抗争が続き、永正四年に細川政元が死去し後楯を失って孤立することになった。

かねてより長宗我部氏の発展を心よく思っていなかった本山茂宗が首謀者となって山田・大平・吉良の連合軍を構成して長岡郡の岡豊城を包囲した。兼序は城外に出て戦い、一時は優勢であったが糧道を絶たれて落城し兼序は自殺した。落城寸前に嫡子千雄丸（国親）を譜代の重臣の近藤正時に託して中村の一条房家の庇護を乞わしめているのである。

一条房家は兼序の死を心から悼んで千雄丸を養育したのである。『四国軍記』に「眼サ

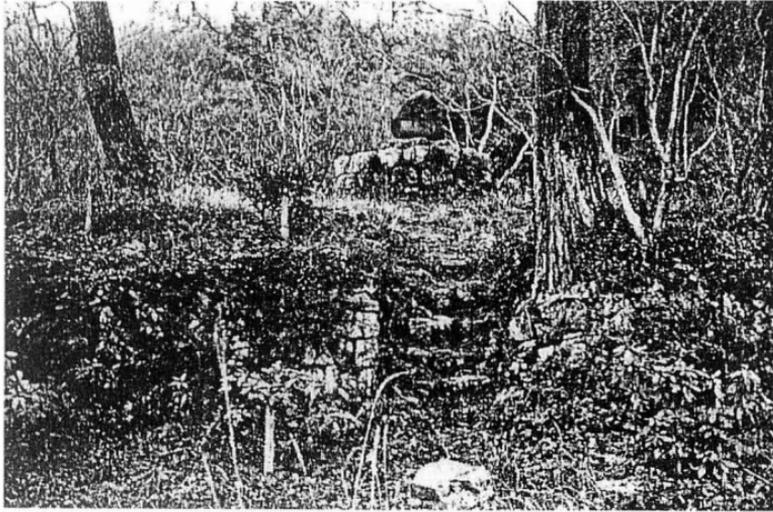
現在、高知空港がある高知平野の北部、物部川の流域に位置する土佐山田市に、別名で「楠目城」とも呼ばれている山田城がある。城主の山田基通は先に本山城主茂辰と組んで岡豊城を攻め滅ぼした仇敵である。その基通は茶の湯や猿楽に耽って政治をかえりみなかったので政道が乱れていた。それを案じて諫言した老臣山田監物を蟄居させるなどの暴挙を行ったので家臣たちの心は基通から次第に離れていったのである。

国親は「好機到来」と判断して天文十八年（一五四九）八月、先ず山田城を攻撃して一気に滅亡させて仇を討ったのである。現在、城趾の近くにある松山予岳寺内に山田氏歴代の五輪塔が苔むして淋しく建ち並んでいる。長宗我部国親が長年にわたって片時も忘れることのなかった宿敵は岡豊城を攻め滅ぼした本山茂辰である。卑屈なまでに計算づくで女を敵に嫁がせるなどして対立の緩和策を取りながら「好機到来」をじっと待ち続けたこの十数年間というものは苦渋に満ちた隠忍自重の毎日の連続であったに違いないであろう。いよいよ好機到来である。風雲急を告げ、風楼に満つるとはこの時であろうか、嵐の前の無気味な静けさがあたりに漂っているのである。

二、土佐の出来人元親

本山城主茂辰しげとぎは朝倉城を制圧して中部土佐の支配を企て、既に高岡郡の南部を占拠し全盛期を迎えていた。永禄三年（一五六〇）五月二十六日の夜、長宗我部国親は遂に宿敵本山茂辰に対し戦いの火蓋を切ったのである。直接の動機は岡豊城から支城の種崎城に兵糧米を送っていた運搬船を、本山氏の配下の者が襲撃し船主を殺し兵糧米を奪い取ったことにあった。長宗我部国親は直ちに浦戸湾の入口にある本山氏の支城である長浜城に奇襲をかけたのである。これを知った本山茂辰は三千余の軍を率いて長浜表に討って出て国親の一千余の兵力と相見え戦いを開始したのである。これが世に有名な「長浜戸ノ本の合戦」である。

この戦いが初陣となった長宗我部元親は、まだ槍の使い方也不知道の初心者であったこ



本山城の詰の段と城址碑

とが『長元物語』に、

いまだやりをうつこと 未鑑突事ヲ不知しらず。教へヨト仰セラル。其

時ぶんご豊後申様。敵ノ眼ヲツクト申ス。又大

将ハ先二行者カ、アトヲ行ク者カト。御

タツネノ時、豊後申上ルハ、大将ハ掛ラ

又者、逃サル者。是ノ謂いわれアル故、先ヲ掛

スト申ス。

と述べている。元親は老臣じんせんじ秦泉寺豊後に教

えられると、直ちに五十騎ばかりの部下を率

いて敵陣の真只中に駆け込んで行った。槍で敵

を突き倒しながら進撃して大きな戦果をあげ

たのである。その様子は『元親記』に詳しい。

この「長浜戸ノ本の合戦」で元親の武名は一

拳に高まって士気が大に上がった。数倍もある敵軍を蹴散らして小高い山の上にある潮江城うしおえを目指して進撃し「あの城を奪い取れ」と叫ぶや否や先頭に立って山を駆け登り城内に躍り込んだが、その時敵は既に逃げ去ったあとで蛻もぬけの殻からであったという。

この時の戦いで「姫若子」元親の奪鬪振りを目の当りにした家臣たちは驚嘆して「広く四国全土の主あるじにお成りなさるべきお方なり」と一層信頼を寄せるようになったのである。爾来元親は「土佐の出来人」と賛仰されるようになったと『土佐物語』は述べている。そのため、「姫若子」と渾名されていた元親の豹変振りを見て「元親の自己演出ではなかったのでは」と疑問を感じた者もあったということである。

こうして長宗我部元親軍は本山氏方の浦戸湾における長浜・潮江の諸城を陥落させて意気洋洋と岡豊城へ凱旋したのであるが、国親は急病で倒れ、数日後の永禄三年（一五六一）六月十五日に没した。臨終の際、国親は「自分が死んでも喪もに服すのは十七日間でよい。必ず怨敵本山茂辰を討ち滅ぼして我が霊前に告げよ」と悲痛な遺言を残してこの世を去ったのである。ここに長宗我部氏の命運は、いよいよこの若き元親の双肩にかかってきたの

である。

元親は父の遺言を守って十七日間の供養を終えると、再び戰場へ向かったのである。翌永祿四年、元親は家督を継ぐと、弟親貞・親泰をはじめ重臣久武内蔵助らの協力を得て、家臣団の大きな期待と信頼を受けて長宗我部家の遺業を受け継ぎ、いよいよ宿敵本山氏と本格的に対峙することとなったのである。

本山氏は「土佐七雄」の一人である。その出自は明らかでないが、長岡郡本山を中心に制拠して五千貫を領している大豪族である。だが、所領の大部分は山間部であるので経済的基盤は弱いのである。本拠本山城は天険の要害ではあるが、経済的な基盤を強固にするためには平地部への進出と海港および水軍の保持は重要な当面の課題であった。茂宗の時代に鏡川を越えて朝倉に進出したのは、長年の念願であった平地部へ勢力を扶植する先駆であったのである。茂辰が父の遺業を継承すると、永祿元年（一五五八）には土佐中央部の広大な領域が本山氏の支配圏に組み込まれることになり、本山氏の繁栄は絶頂期を迎えることになった。

一方、岡豊城を本拠として急速に勢力を伸ばしてきた長宗我部国親は、本山氏配下の土豪や国人に対して攻撃を続け、永禄三年（一五六〇）五月、国親と茂辰の両軍が激突した。長浜戸ノ本の合戦へとつながっていったのである。この合戦での敗北が本山氏滅亡への第一歩となるのであるが、その戦いが長宗我部元親の初陣であったということは実に皮肉なことであった。

長宗我部軍に敗れた本山軍は朝倉城に退いた。元親は、この聖域を一気に突破すべく「かたばみ」の旗印を掲げて凄まじい勢いで進撃を続けた。永禄三年の後半には国沢、大高坂、秦泉寺、久万、福井の諸城が早くも元親の掌中に陥ったのである。翌四年から五年にかけて元親軍の破竹の進撃が続き、高森、神田、石立などの諸城を相次いで奪い取ったのである。『元親記』に、

元親卿は覚世（国親）死去の砌をも不差緩。長浜・薊野二口よりの手遣稠敷し。爰かしこ数度の合戦に打勝、本山居城の外端城十三の分。三ヶ年の内に悉切取。朝倉一城に攻縮る。

とあり、元親の卓越した智略が、この連戦連勝を導いたのである。元親は驍勇の将であると同時に智謀の将でもあった。奪い取った城は重臣たちに宛てがい、戦功を立てた将士には土地を給付するなど、巧みな論功行賞で家臣団の心をつかみ、本山勢に対抗したのである。

勢いに乗った元親は、永禄五年（一五六二）九月十六日、三千余の軍勢をもって朝倉城の攻撃を開始した。この朝倉合戦は土佐国支配の“天下分け目の合戦”であっただけに一進一退の激戦が繰り返されたのである。元親は一旦岡豊城へ引き上げたこともあったが、兵力を整えると相次いで執拗に攻撃を繰り返したのである。朝倉城の維持は限界に達した。これ以上は困難と悟った本山茂辰は城に火をかけて本城である本山城へ引き上げたのである。時は永禄六年（一五六三）一月のことであった。

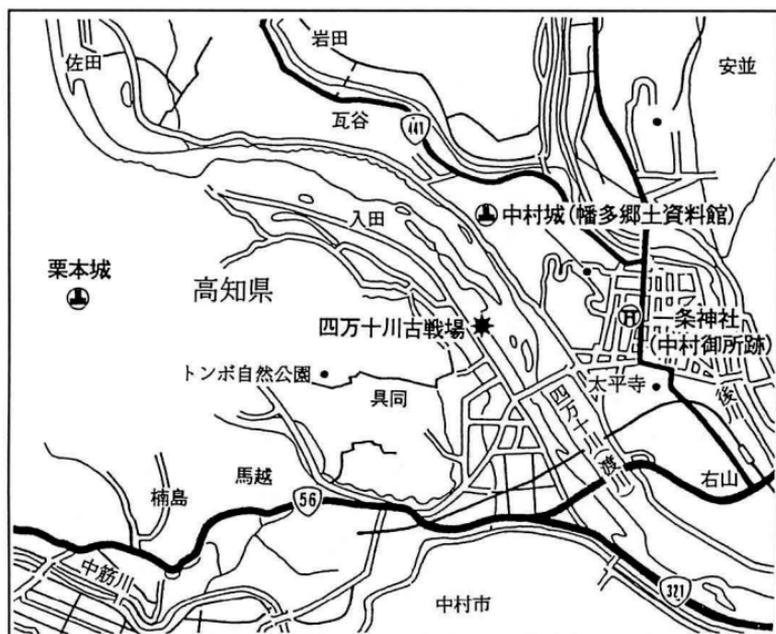
本山城は地理的条件に恵まれた天下の要衝である。これを攻める元親は熟慮を重ね、一条氏と結んで森孝頼を旧領の森城に帰すなどして茂辰に対し心理的圧迫感を与える作戦をとった。永禄七年茂辰はやむなく本山城を放棄して瓜生野へ陣を引いた。この間に茂辰は

病死し、その子親茂があとを継いだ。元親はこの時一挙に瓜生野に攻め入ったので親茂は遂に元親の軍門に降ったのである。時は永禄十一年（一五六八）の冬であった。

長宗我部元親は土佐国最大の豪族本山氏を滅亡させると、吉良・安芸・津野らの諸豪族を次々に降伏させて、養老元年（一五七〇）には土佐国八郡全域を支配することに成功したのである。残っている一条氏は元親の父国親が少年の時代に養育を受けた大恩ある公家大名である。この土佐一条家は京都の摂関家である九条家の分かれである。つまり九条道家の三男実経が分家して一条家を創立したのが始まりで、創立の際に土佐国幡多郡にあつた莊園を九条家から譲り受けたのである。現在の四万十川下流域にあたる「本郷」を中心とする幡多郡の全域と高岡郡窪川町を合わせた広大な莊園である。

しかし、室町時代の末期には足利幕府の綱紀が乱れて幡多荘も「知行の号ありといえども有名無実なり」と一条兼良が嘆いたような状況になっていたのである。

応仁元年（一四六七）八月二十五日、京都で大乱が勃発すると、関白兼良とその子関白教房は奈良の興福寺に難を避けていたが、翌二年教房は奈良を出発して土佐幡多郡の本



中村城周辺マップ

庄中村に移り住んだのである。「御所」といわれた教房の館は四万十川下流の中村に置かれた。中村は渡川（四万十川）・後川^{うしろ}・中筋川が合流するデルタ地帯に位置し、舟運の便に恵まれた豊沃な米作地帯の中心であった。北と東西を山なみが囲み、町の中央を後川が貫流して京都を彷彿させる地形であった。教房は文明十二年（一四八〇）秋、五十八歳で没したので、家は四歳の房家が継いだ。諸豪の反抗に堪えかねて一家をあげて足摺の金剛福寺や土豪を頼つ

て避難するという苦難の時代があったが、房家の晩年には政情も安定し領土も十六世紀の中頃には仁淀川畔に達し、ほぼ土佐半国を占めるまでになって戦国大名に成長したのである。

一条家の館は森山という小丘をうしろにして三方を堀で囲んだ約七反（七〇アール）の広さであった。町人の住む「市屋敷」は立町たちまちという南北の通りである。それに直交する新町、上町そのほか御北小路、西小路、寺小路、奥小路などの地名が仄ほかに京都のイメージを漂わしているのである。現在の井条式街路ができたのは江戸時代の初期であるといわれているが、それには一条家時代の中村が原型であったことはいまでもあるまい。

× × × × × × × ×

永禄十二年（一五六九）長宗我部元親の弟播摩守親貞が、仁淀川を隔てて対峙する一条氏の蓮池城を急襲して占拠した。これが長宗我部元親が一条家の領地を侵略した最初であった。

天正元年（一五七三）、一条兼定が老臣の土居宗算そうざんを手討ちにする事件が起きた。『四国

『軍記』によると、長宗我部元親が土居氏に謀略を用いて様々な工作をしたので、兼定は土居氏を疑うようになったとあるが、『土佐物語』には、兼定が政治をかえりみないので諫言したところ、兼定は激怒して宗算を手討ちにしたと書いている。その真実は不明であるが、それはどうあれ柱石であった重臣土居宗算がなくなったことは、長宗我部元親にとっては幸いであった。果せるかな、一条家の内部にあっては動揺が起きた。兼定は三十歳の若さで隠居させられ、家督は幼少の内政ただまが継ぎ、元親が後見役になったのである。また、内政には元親の女を娶せて、元親の本城である岡豊城に近い長岡郡の大津城（大津御所）に移されて保護を受けることになったのである。

これらのことを許してきた重臣たちに対して激怒した国侍たちは、為松・安並氏らを血祭にあげるといふ不祥事件が起きた。これも元親の謀略によったものであるとの説がある。中村には元親の弟播摩守親定が入部して、本格的に占領体制を固めていったのである。

一条兼定は隠居したのちに出家し、中村を出て母と妻の実家である大友宗鱗を頼って九州の豊後国へ移り住み、キリスト教の信仰を深め、天正三年には受洗して教名をドン・パ

ウロと呼んだのである。しかし、彼は土佐の地が忘れられず、奪回を試みるのである。神父カブラルの書簡によると、兼定の軍勢は十字架の旗をなびかせた大艦隊で土佐に侵入したとある。だが、これは土佐ではなくて南伊予の土佐との国境付近であろうと思われるのである。

大友宗麟の依頼もあって、南伊予の豪族法華津播摩守と御荘越前守らの協力を得て一千余の軍勢で宿毛に進撃して幡多軍西部の旧臣や土豪たちに呼びかけて三千五百余の軍を動かし、渡川（四万十川）西岸の栗木の要害に陣を敷いた。この知らせを受けた長宗我部元親は直ちに西進して中村に入り、渡川の決戦となったのである。

一条兼定の軍は一旦は国土の奪回に成功したという記録が残っているが、恐らく渡川を越えて進撃し東岸の中村を手中に収めたのであろう。『土佐国編年記事略』に所収の現地における伝承の中に、「この戦いの当初、長宗我部軍が敗北して中村東部の逢坂まで退却した」というのがあって一致するので真実であることに間違いないであろう。

長宗我部軍は東部の援軍を繰り出したので、兼定は遂に「戦いに利あらず」と判断して

一条兼定の墓は愛媛県北宇和郡宇和海村戸島本浦の竜集寺にある。形の崩れた宝篋印塔が小祠の中に祀られているが、キリシタンパレンとしては葬られてはいないのである。先に大津城に移っていた一条内政は在城七年後に元親の妹婿波川玄蕃の謀反に組したので、伊予に追放されて毒殺されたともいわれている。内政の子政親は元親の家臣久礼田道祐に養育され「久礼田御所」と称されていたが、慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦で長宗我部家が滅亡したので、土佐国を出て和泉（大阪府）に移ったが、その後の消息は不明である。この政親が土佐を出たことにより、教房が土佐に入国して以来七代百三十余年にして土佐一条家は終焉したのである。

この一条家の滅亡について、当時の戦乱をつぶさに見てきた真西堂如淵が『吉良物語』で厳しく批判しているのである。即ち、

国司亡んで元親其の所を押掠せり。御子内政公をば元親婿にして譲り立て申さんと急ぎ大津の城へ移し奉り、幡多の城へは吉良左京進入替はる。此の内政をも後には行方へも知らず追失へり。又、鳩毒を参らせて害し奉りぬとも風聞しける。（略）前代秦

氏中絶の時、一条殿より絶えたるを続き廢したるを興し給ひし其の恩は百世忘れまじき事ぞかし。然るに眼前に二君を追い一君を弑せし大逆は天人共に棄つる所なれば、地を削られ国の亡ぶること四国征伐と関ヶ原の敗績とを待たずして自滅の機既に顕はれたり。

と実に蔽しく筆誅を加えているのである。戦国時代に生まれ合わせた者は好むと好まざるに拘らず心を鬼にして自分の生きる道を切り開いていかなければ、自分が殺されるのである。食うか食われるか、まるで猛獣の世界の中にいるような因果なもので心が痛むのである。

三、岡豊城と長宗我部元親

岡豊山に初めて城が築かれたのは南北朝時代であるといわれている。建武三年（一三三三



岡 豊 城 腰 曲 輪 跡

六）四月、長岡郡八幡山東坂本で南朝方の軍と戦ったという記録があるので、既にこの時代に軍の拠点としての城塞が築かれていたのは間違いあるまい。戦国時代に入ると、長宗我部国親・元親父子はその城塞を一層強化したのである。

その岡豊城を訪ねてみると、高知県は岡豊山に資料館を建設することになったので、昭和六十年から六十五年まで五カ年の歳月をかけて岡豊城址の精密な測量と発掘調査を行って、四百年前の岡豊城の遺構を明らかにし、それを整備していたので面目が一新していた。



岡豊城の麓にある長宗我部一族の墓

山頂に本丸跡があり、少し下がったところに二の丸の遺構がある。そこには古井戸跡が残っていた。本丸から南に下がったところには家老の屋敷跡があり、西側に凹地を隔てて厩跡うまやがある。空堀からぼりの一部分が残っていたが石垣の跡らしきものは見当らなかった。本丸跡

にも天守閣の礎石と思われるものはなかったから岡豊城も戦国時代の山城として素朴な土塁と空堀によって構築されていたようである。

山の北麓に“北谷”と呼ばれるところがあって、そこには長宗我部氏一族の墓地がある。古びた五輪塔が沢山淋しげに並んでいた。四国全土を制覇しようとした長宗我部元親の墓も滅亡して祀る者がいなくなった今日では、見るも哀れな姿である。標高九七・六メートルの岡豊城趾は、その南麓を国分川が東から西に流れて浦戸湾に

注いでいる。川を隔てて香長平野がずっと開けており、東には国分・左右・比江の丘陵が長く連なっている。北から西にかけては北山の峰々が迫っていて城を築くには恰好の地形を造っている。

また、岡豊城には長宗我部氏一族の菩提寺がある。至徳三年（一三八六）ごろ坂折山に隠溪寺定光庵を建立し、天文二十三年（一五五四）には、国親が江村八幡に千歳山兼序寺を建立している。後に元親が再興して祥鳳山瑞応寺と号している。この瑞応寺はのちに大高坂の北猿ヶ馬場国島へ移されたのである。

この外、元親は永禄元年（一五五八）に土佐国分寺の金堂を再建し、同三年には岡豊八幡宮に三十六歌仙の画像を奉納している。永禄六年（一五六三）五月五日に、本山氏の兵火によって焼失していた土佐国の一の宮高賀茂大明神（現在の土佐神社）の再建のため、京都の土御門有春に指示を受けて永禄十年から元亀二年に至る五年の歳月をかけて「蜻蛉様式」の社殿を造営しているのである。これは凱旋帰陣を象徴したものといわれて有名な作である。



若宮八幡宮社殿

元親が長浜城を攻撃した初陣の際に、一夜布陣したところが、ここ前にある馬場先である。

これと対照的なのが、文禄年間（一五九二〜九六）に、元親によって改築された長浜の若宮八幡神社の社殿で、「出蜻蛉様式」といわれる建築で出陣祈願を象徴したものとわれている。

このように元親は敬神の念が厚く戦国武将の人間味溢れる元親の人物像をうかがい知ることができる。また、「一領具足」と称する農兵を地域的に編成した戦略家でもあったのである。『土佐物語』に、

そもそも、かの一領具足と申すは僅かな田地を領して、常に守護へ勤仕もななく役もなく、ただ己が領地に引籠り自

ら耕し耘り、諸士の交りもせざれば礼儀もなく作法もなく、明暮武勇のみ事として田に出ずるにも鎗の柄に草鞋・兵糧を括り付け、田の畔に立置き、すはといえは鎌・鍬を投捨て走り行き、鎧一領にて差替の領もなく、馬一足にて乗替もなく自身走り廻りければ、一領具足と名付けたり。弓・鉄炮・太刀打に調練して死生知らずの武士なり。と述べている。つまり兵農未分離時代の勇猛にして無礼の地侍というところであろう。

『長宗我部氏掟書』の第二十四条に、

馬の事、三町分限までは、鞍皆具を形の如く仕合い所持すべし、是よりの分限者は相嗜むべき儀、勿論なり。三町より下のものも相嗜むに於ては褒美を加うべき事。

とあるので、“一領具足”というのは、およそ三町歩前後の給地を持つ地侍であったことがわかるのである。

このように“一領具足”といえは長宗我部というほどに土佐が有名であるが、伊予でも“一領具足”といい、肥後では“一領一疋”、関東の結城氏では一騎立の軍装備を“一疋一領”と呼んでいたのである。

その名称はさまざまながら、戦国・織豊期には全国に広くこのような地侍階層があつて、戦国大名の兵力の末端を担っていたのである。長宗我部軍の強さの秘密は、この一領具足体制と検地の厳密実施、長宗我部氏掟書などに見ることができるのである。

四、織田信長と長宗我部元親

天正元年（一五七三）織田信長は將軍義昭を京都から追放したので、室町幕府は事実上滅亡したのである。天正三年、織田信長は前代未聞の三千挺という鉄砲を駆使して、世に有名な武田勝頼の騎馬軍団を設楽原で壊滅させたのである。しだらがはら機を見るに敏なる長宗我部元親は、戦勝に湧いている信長のもとへ、明智光秀を介して長男彌三郎の元服に際して、帽子親になつてもらうことを願い出たのである。

信長の目が、今進めている元親の四国制覇に向けられようとしているのが、少しでも和

らげることができればという深慮が働いたようである。元親の妻は美濃の斎藤内蔵助利蔵の妹であり、利三の母は光秀の叔母である関係で、元親と光秀は縁続きになるのである。

元親はこうした関係を利用して巧みに信長に接近していったのである。光秀から元親の願いを聞いた信長は早速に引き受けて、天正三年（一五七五）十二月二十六日付で彌三郎宛てに書状を送っている。

惟任日向守（光秀のこと）に対する書状を披見した。そこで阿州表に在陣しているとあるが、「信」の字をつかわすので「信親」と名乗るのがよからう。なお、子細しさいについては光秀から述べるであろう。

という意味のものであったから元親の喜びようはまた格別のものであった。阿波への進出も信長の承認を得ているのであるから元親の外交手腕には驚くばかりである。

信長は彌三郎の元服祝いに太刀一腰と栗毛の駿馬一匹を授けたのである。元親彌三郎父子は感銘して、返礼に長光の太刀と馬代として黄金十枚、大鷹二居すえを贈ったのである。信



織田信長公

織田信長という人物は実に不思議な性格をもっている。その生き様を追ってみよう。父信親は信長が生まれると、真面目で責任感の強い家臣の平手政秀を養育係に任命した。

信長の青年時代は、極めて粗暴で奇矯な振る舞いが多く、平手政秀がいくら窘めても聞き入れようとはしなかったのである。父政秀の葬儀の席においてすら乱行をするという始末であったから、政秀は養育係としての責任を問われることになった。その責任をいたく

気に病んだ政秀は、天文二十二年（一五五三）一月十三日、自分の領地である志賀村に帰って自決した。死をもって信長を諫めたのである。このとき信長は二十歳になっていたが、後に政秀寺せいしゅうじを建てて政秀の菩提を弔っているので、信長にとっては政秀の死は痛く心にとたえたのであろう。

粗暴、奇矯な行動が多い信長であったが、その反面において外国人と胸襟を開いてよく話し合うという進歩的なところがあった。最初に出合った外国人はポルトガルの宣教師ルイス・フロイスである。フロイスは日本でキリスト教の布教を許可してもらうために信長に謁見したのであるが、逆に信長はフロイスに外国の政治や社会のしくみについて質問攻めにするほど熱心に勉強したといわれる。

また、イタリア人のオルガンチーノ・ワリニャーンなどの宣教師とも深交を重ねているため、彼等は書簡や報告書などで信長のことを多く書き残しているのである。即ち、

この尾張の王は長身でやせており、髭は少なく声はかん高い。武技を好み日常の振る舞いは粗野で乱暴だが、正義感が強く、名誉を非常に重んじて決断が早い。傲慢で、ほかの大名を軽蔑し、まるで臣下に対するかのように、肩ごしに話しかけるような不遜な口の聞き方をしている。卓抜した戦さ上手である。部下の言うことには耳をかさず、多くの人に恐れられている。ぐずぐずしたり長話が嫌いである。

と信長の印象をしっかりと見とどけているのである。また、信長が如何に畏敬されてい

たかについてフロイスは、

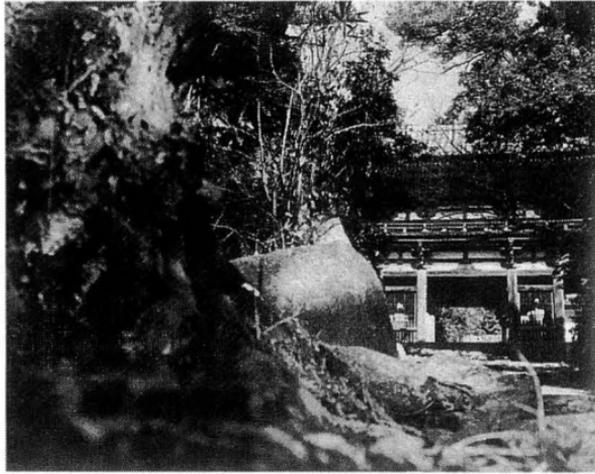
都で大へん權威のある武士ですら、信長の面前に出ると、ただ手と頭を地面につけて平伏するばかりで、誰一人として信長の前で頭を上げる者はいない。

と、家来たちにとって信長は恐れられた存在となっていたようである。

なお、信長はすばらしい理性と明確な判断力を持ったインテリ風の合理主義者であったと評されている。しかし、信仰心というものは全く無い人物といわれている。神を信じない上に宇宙創造主の存在や靈魂の不滅ということを信じない人物で、「死後は何も残らない」と言い切っているのである。

さらに、信長は自分のことを「第六天魔王である」と称している。第六天魔王というのは悪魔の王、様々な宗教の敵と言った意味であるから、信長は「自分以外に信じるものはない」と思っていたことがよく理解できるのである。

ところが、これほど無信心な信長が天正十年（一五八二）に、安土城に摠見寺を建てて各地で崇拜している仏像を集めさせたのである。このことについてフロイスは、



摠見寺仁王門（安土城内）

偶像を崇拜させるためではなく、自分を崇拜させるためである。彼は死んでしまう人間としてではなく、不滅の神として尊敬させることを望んだのである。彼は日本においては、自分こそが生き神、生き仏である、[、]と思っていた。

と、信長の傲慢な態度を非難している。このことから想起させるのは、昭和八年（一九三三）に、当時の陸軍大臣荒木貞夫中将らが天皇を現^{ひどがみ}人神にまつり上げて、全国の学童に対して皇道

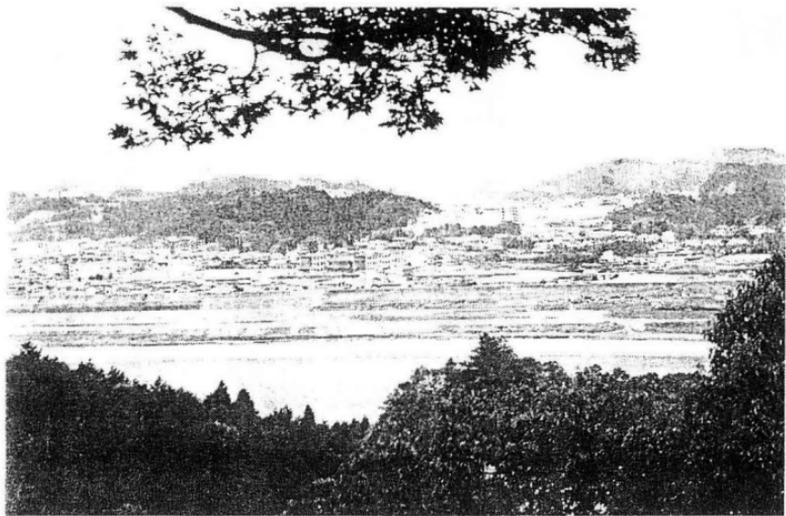
教育の徹底を強行し、立憲君主制による民主政治を天皇による支配、即ち軍部の独裁政治にすげ替えたのであるが、この信長の独裁政治を真似て再現させたのであろうか、あくまでも勝利を言い通して国民を欺いた日本の指導者ことに軍閥は、遂に日本をして無条降伏

命じたところ、三百貫入り用といったが、実際には千貫もかかった。だから千貫ではできないであろう。寄付で民百姓に迷惑をかけてはいかぬ」とて、三千貫を与え「このほかに入り用あれば、いつでもつかわすであろう」とつけ加え、平井久右衛門を奉行に命じたのである。信長の人間味のかくれた一面を知った思いで心をうたれたのである。

実に織田信長という英雄は常識では計り知れないところのある人間であることを思う。実に不思議な人物である。

五、長宗我部元親の伊予侵入

長宗我部元親によって豊後国臼杵に追放されていた一条兼定が、南伊予の法華津播摩守と御莊越前守の援助を受けて旧領の中村を奪回しようとして兵を挙げた。これを知った元親は天正三年（一五七五）に中村に向けて大軍を繰り出したのである。



中村城より渡川（四万十川）古戦城を望む（渡川合戦場）

キリシタン関係の文献によれば、一条兼定は洗礼を受けて入信していたので、十字架の旗をなびかせながら土佐の西部に進攻したとある。多分、宿毛付近に上陸して伊予の軍勢と戦ったのであろう。一条方の軍は、一旦は中村の奪回に成功したという記録がある。渡川（四万十川）を渡って進撃し中村を手中に収めたのであろう。この戦いの初めには元親軍が敗北し中村東部の逢坂まで退却したが、元親は援軍を繰り出して中村を奪い返したのである。

一条方の軍は、栗本城に集結したので、両軍は渡川を挟んで対峙する状態となった。

『土佐物語』には、

一条方の軍三千五百に対して、長宗我部軍は七千五百であった。一条方は渡川の浅瀬に乱杭を打ち込んで、これに引っ掛かって難渋しているところを討ち取ろうという戦法であったが、長宗我部軍は二手に分かれ、一手が浅瀬を渡るように見せかけている間に、別動隊が上流を隠密裡に渡って敵の背後から不意をついて大勝した。討ち取った敵の首は二百余なり。

と述べている。一条兼定は落城寸前に城を出て伊予に逃れ、法華津氏の庇護のもとに豊予海峡の孤島「ナガシマ」で隠棲いんせいしたといわれている。

長宗我部軍は天正五年（一五七七）、宇和郡の河後森城かわごもりを陥れ、ついで、西ノ川・魚成うおなし・曾根・庄崎など、宇和・喜多両郡の諸城を降伏させたが残りの諸城は容易に陥落しなかったのである。その頃、元地藏嶽城主宇都宮元綱の家臣で「勇猛の士」といわれた大津城主菅田直之が八幡森・鍛冶森城主佐久間安房守と争いを起こしたとき、直之は元親に援軍を頼んだ。元親はこれに応じて大軍を送り込み一挙に攻撃して佐久間安房守を滅ぼし、その

領地はすべて菅田直之に与えている。

こうして長宗我部元親の支配下に入った菅田直之ら南伊予における諸將たちは、西園寺公広の拠城黒瀬を包囲した。この状勢を見た河野通直は脅威を感じて、中国の毛利氏に援軍を依頼した。毛利輝元は小早川隆景に命じて手勢八千を送り込んで河野通直軍と共同して菅田直之に逆襲をかけた。直之は急遽再び元親に援軍を乞うた。元親は妹婿の波川玄蕃に命じて救援に向かわせたので、千二百の援軍と直之の軍は、小早川と河野の合同軍と激しい戦いを展開したのである。

ところが、波川玄蕃は小早川隆景の甘言に乗せられて和睦し、菅田直之を見捨てて退却したので、直之は苦戦の末に戦死した。河野通直軍も勇将平岡勘解由左衛門を失ったので、兵を収めて湯築城に引き挙げることにした。

この戦いで、毛利氏の援軍によって勝利を得た河野氏をはじめ北伊予の諸城主たちは一層元気づけられた。村上武慶・来島通康らの伊予水軍が土佐に進入する勢いであったので、長宗我部元親の四国制覇はますます困難となった。

土居清良は戦国時代の立派な武将であるとともに、この地方の文化を向上させた人物として名が知られている。東宇和郡黒瀬城主西園寺公広きみひろ麾下十五将の一人で、有名な女傑土居妙栄の孫にあたるのである。先祖は紀州（和歌山県）牟婁郡土居の鈴木氏である。幼少の時は不遇で、一条家に養われたが、三間みきに帰ってからは西園寺家の武将として成妙郷の内二千六百余石の知行を受け、立間・喜佐方・立間尻・土居・垣内・岡本の各城を守っていた。

永禄年間から天正年間にかけては、西園寺公広に従って活躍し、長宗我部元親と戦って多くの手柄を立てた智勇兼備の名将として領民たちに慕われていた。天正十二年（一五八四）、西園寺公広が黒瀬城を開け渡して元親の軍に降伏した翌年、秀吉の四国征伐のため領土を失うことになった清良は、土居中村（三間町）でひそかに隠棲していたのである。その後、宇和郡の領主が伊達秀宗にかわったとき、清良はその才能を見込まれて招聘されたが固辞して応ぜず、風俗改善・産業奨励に努力して地方文化の向上に貢献したので、彼の功績は『清良記』によって広く世に知られることとなったのである。

寛永六年（一六二九）三月に没し、三間の竜泉寺に葬られたが、寛文年間（一六六一～七二）に至って村民たちは、彼の徳を偲んで「清良神社」を建てて祀っているのである。

六、天下布武を賭けた織田信長

群雄割拠の戦国時代に「天下布武」を賭けた男、織田信長という武将とは一体どのような人物なのであろうか。利慾と謀略が渦巻いている戦国の世にあって、ひたすら自分だけを信じて闘い抜いた英雄の織田信長という人間の中身は、決して尋常一様のものではなかった筈である。

少年時代の信長は、およそ大名の子とは思えぬ異様な形なりをし、奇矯な振る舞いをしていたので、家中からや世間から「大うつけ」「大たわけ」と陰口を言われていたということは、もう既に知れ渡っていることであるが、そのように悪評を浴びていた問題少年が、後世の



常在寺蔵画像 齋藤道三

であったのではなく、蹴鞠^{けまわし}や能、音曲、和歌の会、月見の宴を嗜むなどの教養を身につけていた。信長はこうした文武両道に優れた父のもとで格別の波乱もなく幼年期を過ごしたが、体質が合わなかったのであらうか古典的な教養には縁遠いようであった。

天文十六年（一五四七）、十四歳のとき三河に初陣した信長は、その翌年美濃の齋藤道三の娘濃姫と結婚し、弓・鉄砲・刀槍などをそれぞれの師について学び、若侍たちを集めては竹槍合戦をやらせたりして青春時代をダイナミックに送っていた。その頃の信長は行儀が悪く、夏は袖をもぎ取った湯帷子^{ゆかたびら}を着て、半袴を着けた腰には火打袋や小物入れの袋をぶら下げ朱鞆の刀をぶち込んで、栗や柿や瓜を食い散らしながら歩いていた。

このように常識を逸した様子や行動

をしている信長を見て、「彈正忠殿のお子ではないのでは」などと不穩な噂が流れたこともあったという。濃姫の父齋藤道三は、噂の真否を自分の目でたしかめようと、婿舅むこやうとの対面の儀を申し入れたのである。場所は美濃と尾張の国境にある正徳寺に決定した。当日、道三は天下の定法に則して、嚴肅な礼装を身につけて迎えたのである。

一方、信長はいつもの異様な風体で馬またがに跨またがってやって来た。供の者は七百人で、槍衆は三間半の朱槍五百である。信長は正徳寺に到着すると早速控室に入った。暫くして出て来た信長を見た道三をはじめ居並ぶ一同の者たちは思わず息を呑んだ。あの茶筌ちやせんまげは折り鬘はなに、衣装は濃い藍色ながばかまの長袴ながばかまで、非の打ちどころのない正装であった。信長は白皙はくせきの好男子で、匂うばかりの二十歳の貴公子振りに、皆は圧倒されたのである。

この信長を見た齋藤道三は、「無念であるが、自分の子らは間違いなく、あのたわけの門外に馬を繫つなぐことになろう」と言ったという。美濃国の支配は自分一代で終わり、信長の時代になるだろうと思ったというのである。信長の大刀、脇差はいずれも柄つかを長くし、しめ縄で巻き立ててあった。柄糸で巻いたものは激戦になると血糊で滑り易くなるので、

それを防ぐためしめ縄を巻いていたのである。更に、刀には腕貫をつけていた。刀が手から飛ばされないための実戦用の構えなのである。

このような戦闘精神に満ち溢れた構えを見て、斎藤道三は最早や我が子が出る幕ではないと悟ったと『信長公記』にはっきり書いてある。信長の生き様というものは、戦国時代を生き抜こうとする覚悟の程が実に満ち溢れているのである。

永禄十一年（一五六九）二月、織田信長は自ら奉行人となって、將軍足利義昭のために館を造営していた。その時一人の人夫が若い女をからかっているのを見つけた信長は、つかつかと歩み寄ったかと思うと無言で、アツという間に人夫の首を斬り刎ねたのである。石材には石仏を割って使わせたり、内部の装飾には京都や奈良の名刹から襖絵をはずして持ってこさせて使ったりしたのである。正に普通の者が思いついたり実行したりできることではない仕種である。

元龜二年（一五七二）九月十二日、信長は大軍を指し向けて霊場比叡山を包囲した。「昨年言葉をつくし、誓紙を与えて勧告したにも拘らず、王城鎮護に当たるべき僧侶が、



延暦寺の焼き打ち

延暦寺の僧兵は浅井・朝倉と組んで反信長勢力だった。元亀二年九月十二日、不意を襲った信長軍は徹底した掃滅戦を断行した。

日常の行儀仙道の作法を等閑なおよろにして、天道の怒りを恐れず淫乱いんらんにふけり、魚鳥の肉を食らい金銭財宝に心を奪われている。今までは、主上や公方の取りなしがあったので退治を遠慮してきたが、もう許すことはできぬ」と、隠忍自重の末に決断した最後の手段として、全山焼き打ちの命令を下したのである。

信長の命令一下、包囲していた大軍は一斉に比叡山に攻め入って、根本中堂・山王二十一社の霊仏霊社、僧坊、経巻などを悉く焼き払ったのである。僧侶や男女三千人は右往左往するばかりで、ほとんどの人が素足のままで八王寺山へ逃げ登ったり、社内に隠れ籠ったりした。信長の軍はなお

も関の声をあげて攻め登っていった。

僧侶といわず俗人といわず、上人も智者も児童も皆首を切って信長の前に差し出した。

数千の屍体が散らばって、まるで地獄絵のようであると言わなければならないという。これは『信長公記』にある叙述の概要であるが、宣教師ルイス・フロイスの『見聞記』によれば、「あらゆる神・仏、蔵書、装飾品を有するきわめて多数の寺院、日本宗派の源泉で、主な大学である比叡山を完全に焼却破滅せしめた」と、叡山の焼き打ちには衝撃的な出来事であったと書いているのである。

『平家物語』にあるように、白河法皇が「賀茂川かもがわの水と双六せうろくの賽と山法師は、わが心かなわぬもの」と嘆かれたことがあるように、叡山延暦寺と南都興福寺の対立が激化して血で血を洗う抗争が繰り返されるようになって以来、僧侶集団はおおむね「諸国の窃盗・強盗・山賊・海賊等の欲心熾盛しきじょうにして生死不知の奴原やつばら」によって構成されていたといわれ、その状態が長く続いていたので、信長が勧告したが、これを無視したので遂に激怒したのも無理からぬことと思うが、その方法はあまりにも惨酷悲惨であった。

とであった。講師に国学院大学の宮本義己先生を迎えて、安土城、観音寺城、佐和山城、長浜城、国友鉄砲資料館、姉川古戦場、小谷城、虎御前山（秀吉陣所跡）、金ヶ崎城、一乗谷・朝倉氏遺跡資料館、福井（北の庄城・柴田神社）、北国街道（木ノ芽峠・栃ノ木峠）、賤ヶ岳古戦場と三泊四日の史跡探訪であった。参加者の中で私が最高年齢であったので、山城に登るときはいつも殿しんがりを務めざるを得なかったが、日本中史専攻の講師による指導であっただけに私にとっては未知のことが多く勉強になり印象の残る研修であった。

× × × × × × × × × ×

朝倉氏はもともと但馬国の武士であったが、南北朝の頃、朝倉広景が越前にやって来たのがその始まりである。主人である斯波高経と共に新田義貞と合戦し、勲功あってこの地を拝領したという。これが一乗谷に広大な朝倉氏の所領を築く第一歩となったのである。

応仁の乱のとき、はじめ西軍に味方していたが、途中から東軍細川勝元側に味方し、それ以来越前の経営を任せられることとなった。ここを越前の首府とし孝景が一乗谷の初代となったのである。四代目の朝倉氏が絶頂時代であったのに、五代目義景の時代には信長に



一 乘 谷 朝 倉 氏 遺 跡

よって滅亡させられたのである。

一乗谷朝倉氏の遺跡は福井市街から東南に十キロばかり行ったところにある。狭く横行き深い谷に構築されており、現在は山城、武家屋敷、寺院、商人や職人の家が再現されている。清水が湧き出ており長期にわたる籠城にも可能な地区であり、空堀や堅堀なども張りめぐらされて防禦は容易な地形になっている。今は県立朝倉氏遺跡資料館が建築されていて遺品類が沢山展示されて閲覧が容易に出来るようになっていいる。

小谷城跡は伊吹山地と琵琶湖の間に位置している。四国の山城しか見ていなかった私は

中央の山城である小谷城が非常に高く大きいのに目を見張らされた。小谷山の山頂には出丸があり、大嶽おおすくから伸びる二本の尾根があって、その尾根伝いに城が築かれている。東側に伸びる尾根の上には本丸をはじめとして、中丸、山王丸、京極丸などと共に郭群くわくぐんが配置されており、南に向かっている尾根には福寿丸などが築かれていた。

この二本の尾根の谷間に居館や武家屋敷が作られ、敵が侵入してくると予測される南側の端には堀が設けられている。守りを堅固にするため、山の外周にも出丸を置き敵に備えている。中世山城の手法のような城で、城郭史の中でも有名である。野面積みのざらつの石塁の荒々しさが目をひく。本丸跡、長政自刃の地などを示している碑や浅井長政一族の供養碑の前に立つと往時を偲び目頭が熱くなるのを覚えた。悲劇の美女お谷おたにの方（お市の方）が住んでいたといわれる「お局屋敷おぼくね」に佇むと、兄信長の軍勢が関との声をあげて駈け登ってくるような錯角を覚えるのであった。

お市の方は織田信秀の女、信長の妹である。兄信長の命により、近江小谷城おだに主浅井長政の室となり三女（豊臣秀吉の側室淀殿・京極高次室常高院・徳川秀忠室崇源院）および男



浅井長政夫人（お市の方）

実の兄、信長の手で夫ばかりでなく、幼い長男も殺されてしまった。（高野山持明院蔵）

子をもうけるが、天正元年（一五七三）、浅井長政は信長に攻められて滅亡、その後は信長の庇護のもとにあったが、同十年本能寺の変後三女を連れて柴田勝家に再婚し、越前北庄きたのしょうに住み小谷の方と称せられたのである。しかし、翌十一年、秀吉に攻め

られて勝家とともに自刃した。三十七歳の女盛りであった。

浅井長政は近江国小谷城主で永禄三年（一五六〇）に家督を相続し、同年六角義賢を破って南進政策をとり、同十一年ごろ、その勢力圏は伊香・浅井・坂田の江北三郡に加えて大上・愛智・高島の三郡に拡大した。支城在番制、同名被官層への直恩給付、与力化など新しい家臣団編成に努め、また流通経済の発達に対応した商業政策をとるなど、領国支配の



姉 川 古 戦 場

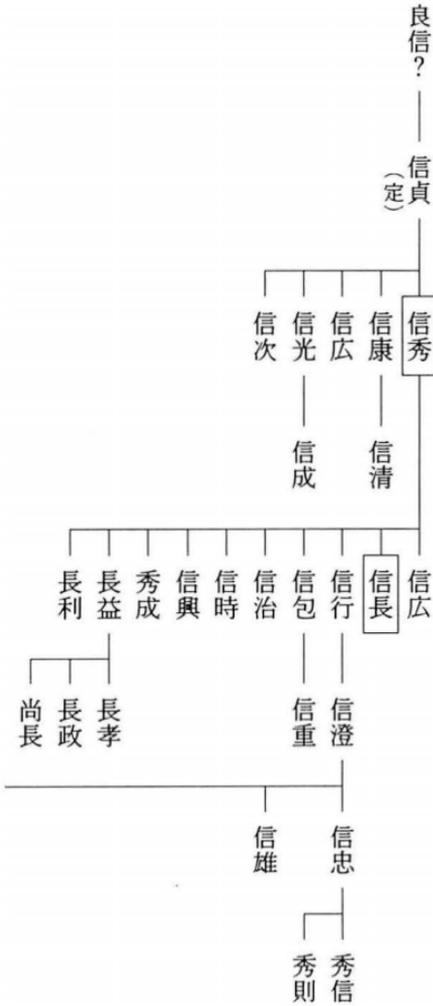
基礎を固める施策を打ち出したのである。

一方、外交面では、尾張・美濃を平定した織田信長と友好関係を結び、永禄十一年信長の妹お市を室に迎えた。しかし、元亀元年（一五七〇）、信長の越前進攻が始まると、従来から同盟関係にあった朝倉氏と協力し、六月織田・徳川連合軍と近江国姉川で戦ったが大敗を喫した。三好三人衆や本願寺と結んで反撃を試みたが失敗し、天正元年（一五七三）八月、信長の大軍に小谷城を包囲され、朝倉氏の滅亡に続いて小谷城も落ち、二十一日、長政は自殺した。

落城の寸前に、室お市と三人の娘は信長に

引き取られ、のち長女茶々は豊臣秀吉の側室淀殿に、二女初は京極高次の室に、三女達子は徳川秀忠の室になった。寛永九年（一六三二）、長政には従二位・権中納言が追贈されたのである。

織田氏略系図



七、本能寺の変と長宗我部元親

天正十年（一五八二）六月二日弘暎のことである。織田信長が京都の四条、西洞院本能寺に宿泊している時、突如信長側近の重臣明智光秀が三万三千の軍勢を率いて十重二十重に取り囲んで襲撃した。世に有名な「本能寺の変」である。

希代の英雄織田信長は、撃ち込んでくる鉄砲の音に驚き「さては謀反か、如何なる者の仕業か」と言えば、森蘭丸が「明智の手の人と思われませう」と申し上げると、「やむを得ない」と言つて覚悟を決めた。明智勢は間を置かずに次々と進入してきたので、表御堂にいた御番衆は退いて御殿の人々と一緒になって戦った。馬屋からは矢代勝介・伴太郎左衛門・伴正林・村田吉五郎らが斬つて出たが直ぐ討ち死にした。仲間衆の藤九郎・藤八・岩彦一・弥六・熊・小駒岩・虎吉・その子小虎若をはじめ二十四人が馬屋で討ち死にした。



本能寺総門（通称表門）

御殿の中で討ち死にしたのは、森蘭丸・森力丸・森坊丸の三兄弟に小河愛平・高橋虎松・金森義人・菅屋角蔵・魚住勝七・武田喜太郎・大塚又一郎・狩野又九郎・蒲田与五郎・今川孫三郎・落合小八郎・伊藤彦作・人々利亀・種田亀・山田孫太郎・飯河宮松・祖父江孫・柏原鍋兄弟・針阿弥・平尾久助・大森孫三・湯浅甚介・小倉松寿らであった。

これらの小姓衆はみな敵勢に立ち向かい渡り合って戦ったが、多勢に無勢遂に討ち死ににしてしまったのである。

信長は自らも弓矢を取って戦っていたが、時が経つと弓の弦が切れたので、槍を取って戦っ

たが、傷を受けたので、引き下がって「女たちはかまわぬ、急いで脱出せよ」と命令し、殿中奥深く入って炎上している本能寺の中で自刃した。ここに信長、波乱万丈の四十九年の生涯を閉じたのである。

× × × × × × × × × ×

“本能寺の変”の時、たまたま本能寺と道路一つ隔てた南蛮寺（イエズス会教会）で、事件を目撃した宣教師フランシスコ・カリヤンは次のように書き残しているのである。

明智の兵士たちが見たものは、ちょうど手と顔を洗い終って手拭を使っている信長の姿であった。すぐさま彼らは横合いから信長めがけて矢を放った。信長はこの矢を引き抜くと、薙刀を取り出してきて暫くは戦ったが、腕に弾創を受けて寝所に引き返して戸を閉じた。ある人は彼が切腹したと言い、或る人は宮殿に自ら火を放って焼け死んだという。しかし、私たちが知り得たことは、声ばかりでなく名前を言っただけで人々を戦慄させた信長が、ただ一本の毛髪も残さずに灰燼と化したということである。とあって、『信長公記』とは大きく食い違っていることに注目したい。いずれが真実に

武功を立てたことが信長に認められて丹波一国を与えられたのである。

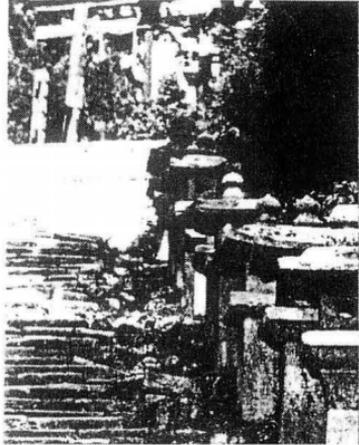
その年の五月、中国攻めに出陣していた秀吉から信長のもとへ増援を求める急使が来た。信長は明智光秀に増援のために出陣を命じたのである。光秀は直ちに本拠の近江坂本城に帰り、五月二十六日居城の丹波亀山城に立ち戻って出陣の準備をした。

信長も自ら備中に進出するため、六月二十九日に上洛することにした。安土城の留守衆には、津田源十郎・賀頭兵庫頭・野々村又右衛門・遠山新九郎・世木弥左衛門・市橋源八・榎田忠兵衛らに命じた。二の丸の番衆には蒲生右兵衛大輔・木村次郎左衛門・雲林院出羽守・鳴海助右衛門・祖父江五郎衛門・佐久間与六郎・蓑浦次郎右衛門・福田三河守・千福遠江守・松本為足・丸毛兵庫頭・鶺鴒・前波弥五郎・山岡対馬守らを命じて、信長は小姓衆を連れて上洛したのである。すぐ備中へ出発する予定であったから「国に戻って出陣の用意を整え、布令があり次第出発せよ」と命じていたので、このたびの上洛には、お伴の軍兵を連れていなかったと『信長公記』には書いている。

六月四日、信長は七十余人の小姓や馬廻りの者を率いて安土城を出発し、京都の本能寺



愛宕神社



愛宕神社

に到着、旅装をといて休息していたのである。明
智光秀は五月二十七日、愛宕山に参籠して太郎坊
の社前で三度も神籤みくじを引いて運勢を占った上、二
十八日には西坊で連歌の興行を催した。発句は光
秀で

ときは今あめが下知る五月哉 光秀

水上まさる庭のまつ山 西坊

花落つる流れの末をせきとめて 紹巴

「時は今である。雨が世に降る五月であること
よ。土岐の一族である自分が天下を支配すべき五
月となったのだ。五月雨さみだれが降り続き、川上の水音がいちだんと高く響く庭には、松山が見
えることだ。花が落ち積ったことだ。遣り水やの流れの先をせき止めて、ご謀反をお止めし
たい。」という意味のものであったとされている。

このように光秀は百韻を詠んで神前に納め、五月二十八日丹波の亀山城に帰ったのである。発句としては妙に大上段に振りかぶった力みりきが現れているので、光秀はこの時既に信長襲撃を決意していたように見えるが、連歌師を相手に胸の内の大事を明かすわけがあるはずもないので、事変のあとで憶測したものと見るのが妥当であろう。

六月一日、夜十時頃明智光秀の軍勢は亀山城を出発した。「軍容を信長公に見せるため」と称して、備中には向かわず京都に向かって粛々と行軍を続け、二日の未明には信長の宿所本能寺に到着し「敵は本能寺に在り」と一斉に襲撃の命令を下したのである。

京都所司代村井貞勝の通報によって事変を知った信長の子信忠は、妙覚寺を出て勘解由かかげゆ小路室町にある誠仁親王まことひとの二条御所に入り、親王らを内裏に移すと、数百人の馬廻りの者たちと防戦したが、衆寡敵せず村井貞勝らと共に討ち死にしたと、『兼見卿記』は述べている。

光秀は信長を討ち果したのち安土城に入った。ともかくも天下は一時光秀の手中に入ったわけであるが、呼び掛けた意中の武将蒲生氏郷父子は光秀に従わず、丹波国の細川幽斎・

忠興父子も信長を弔って元結を切ってしまったことは、光秀にとっては思いも寄らないことであって大きな誤算となった。光秀は己を高く評価して過信していたようであった。

明智光秀が「主君殺し」という反逆に走った理由については、いろいろの説が伝わっているが、真実を示している史料はなく、いずれも推察の域を出ないものである。天正七年（一五七九）に八上城やがみを囲んだとき、光秀は母親を人質に差し出して降伏させ、城主波多野秀治を安土城に送ったが、信長は何を思ったのか、人質交換の約束を無視して秀治らを殺してしまったので、光秀の母が惨殺される結果となった。このことを光秀はひどく怨んで反逆に及んだとする説がある。また、天正十年（一五八二）五月、信長から受けた加封本領安堵の謝意を表すため安土城を訪問した徳川家康の饗応役を、光秀が命ぜられていたが、料理の魚が異臭を放っていたのを、下見に来ていた信長が見つけて腹を立て、饗応役を罷免したので光秀の面目は丸潰れとなったこと、武田勝頼の騎馬軍団を壊滅させたあとの祝宴で、光秀が「骨を折った甲斐があった」と言ったことを聞いた信長が、「お前がどんな手柄を立てたというのか」と大勢の前でそして恥をかかせたからだなどと、いろいろ

る尾鱸のついた話が伝えられているが、これといった確実な史料があるわけではなく謎とせられているのである。戦国史研究の第一人者高柳光寿氏は考証の結果、これらはみな誤りであると発表している。

明智光秀は、かつて將軍足利義昭に仕えた経験があったが禄高は低かった。信長に仕えてから、めきめき頭角を現わして羽柴秀吉と並んで重要され、最終的には信長のもとで秀吉・柴田勝家・丹羽秀長・滝川一益らと共に五大軍団を形成するに至るまで、出世街道をまっしぐらに進んできた武将である。戦国時代は、ひとり信長だけでなく、有力武将はみな、好機さえあれば「天下取り」の願望はもっていたであろう。

天正十年、柴田勝家は佐々木成政・前田利家らを従えて上杉景勝の軍と越前・越中で対峙しており、羽柴秀吉は毛利勢との決戦をひかえて中国に出陣中であり、徳川家康は畿内に来遊中であった。織田信長も魔がさしたのか、わずかの手勢だけで本能寺に宿泊していた。まさに千載一遇の好機であったのである。

光秀は稀に見る文化人であっただけに、今まで体の表面に現わすことのなかった内向性

型の光秀は、心の中で燃えていたエネルギーを一度に爆発させたのかも知れないのである。〃本能寺の変〃は、光秀の性格的弱点が爆発して強大な力となって発揮された事件といえるのである。

信長や秀吉と常に直接交渉をもっていて、信任が厚かった京都吉田神社の神官吉田兼見卿が書き残している『兼見卿記』によると、光秀が本能寺で信長を討ったあと、午後二時頃に大津通りを近江へ下向のとき、吉田兼見はわざわざ栗田口まで馬で駆けつけて、光秀と対面し「在所の儀、万端頼み入る」と申し入れている。兼見の妻は細川忠興の娘であり、忠興の妻は明智光秀の娘である関係で、光秀と兼見は特に親しかったのである。

朝廷では、この兼見を〃本能寺の変〃後は、光秀との折衝に当てることにした。兼見は誠仁親王から光秀への使者を命じられ、七日に安土城にいる光秀を訪ねている。この時のことを『兼見卿記』は「この度、謀反の存分を雑談」と記している。その後、兼見の屋敷を訪ねた光秀は「一昨日の朝廷よりの使いに対する礼に来た旨」を述べ、朝廷に銀子五百枚、五山と大徳寺へ各百枚、さらに兼見に五十枚を進上することとして、兼見にこの事を托し

ているのである。

これらを見る限りでは、「本能寺の変」後における光秀の心の動搖は全く感じられないのである。

× × × × × × × ×

近世史料叢書『翁草』によると、京都山崎で秀吉軍と対戦し天王山の戦いに大敗したのち明智光秀は坂本城へ敗走の途中小栗栖おぐるすで土民に襲われて死んだのは影武者であって、光秀は無事に落ちのびて美濃の山中にはいり、荒深又五郎と名を変えて生き続けたというのである。

この外に、小栗栖死亡の否定説は『美濃志』『明智旧稿実録』にも記載されている。また、比叡山の松禅寺という古刹に、明智光秀が寄進したといわれている石燈籠がある。「慶長二十年、奉寄進、願主光秀」と、天正十年からすると三十四年後の年が刻まれているのである。

さらに不思議なことは、小栗栖村で何事もなく生きのびた光秀は、比叡山にはいり、名

いた。

ところが、思いがけもなく、本能寺の変^がが起こったのである。元親は、この事変によって間一髪のところまで討伐をまぬがれたわけである。元親は信長の死後も何事もなかったかのように振る舞ってはいたが、心の中では「これ幸い」とばかり喜んでいたに違いあるまい。

天正十年（一五八二）八月、元親は弟の香宗我部親泰・長男信親を長とする二万三千の大軍を岡豊城から出発させて阿波に侵入を開始した。三好方の城を次々と陥落させていったが、元親のねらいは三好勢の総帥十河存保^{ながやす}の拠る勝瑞城を陥落させることであった。三好勢は十河存保を大将に中富川原北岸で待ち受けた。ここで四国最大の合戦が繰り広げられたのであるが、信長の後楯を失った三好方は、もはや元親の敵ではなかった。またたぐ間に敗退し、勝瑞城に立て籠って抗戦したが、九月二十一日遂に落城した。ここに元親は待望していた阿波国の制覇を成し遂げたのである。織田信長なきあとのドサクサにつけ込んだ「国盗り劇」であった。

長宗我部元親はいよいよ勢いを増して、十月には讃岐に侵入し、勝瑞城を追われた十河存保が本拠の十河城にあったところを三万五千の大軍で包囲したのである。だが十河城は堅城で容易に落ちそうにもない。元親は兵力の増大を図って力攻めすることを止め、長い戦いで疲れている兵を休ませるために一旦土佐に引き揚げることにした。そのため讃岐平定は先送りとなったのである。

八、河野氏元親軍に降伏説の謎

四国全土の制覇を目指した長宗我部元親は伊予の中部に侵入して湯築城を攻撃した。城主河野通直は家臣たちの意見を入れて元親に降伏したので、天正十三年（一五八五）の春、長宗我部元親は四国全土の制覇を成し遂げた。——というのが従来の通説になっている。

吉川弘文館の人物叢書、山本大著『長宗我部元親』^{たけし}に、

このような毛利氏の援助にも拘らず、元親は次第に河野氏を圧迫していった。天正十一年（一五八三）十二月十五日、毛利氏の使僧安国寺惠瓊等が、輝元の老臣佐世・福原等に与えた書状に、「眼前ニ河野殿ニ長曾我部每事仕勝候」（『毛利家文書』）と書かれてあるように、河野通直は長宗我部元親のために、早くから常に敗北を喫していたので、河野の家臣達は「斯ては当家もいか有らんずらん。所詮弱みなき先に降を乞給はゞ、四国に双びなき大家にて候間、元親も自余の城主には準ずべからず、「一家同門の思ひをなし給ふべし。急ぎ書簡を遣わされ、然るべく候」（『土佐物語』）と通直に進言した。ここにおいて通直は家臣の意見をいれて、ついに降伏し、家老平岡某を人質として岡豊に差出したのであった。このような情勢に応じて、西伊予の諸将も無益な抵抗をやめたので、天正十三年（一五八五）の春、漸くにして全伊予の平定がなったのであった。元親時に四十七歳。

と述べているのである。しかし、天正十一年十二月十五日付の安国寺惠瓊等の書状に記してある戦況は、時期から推察すると『南海通記』卷十六の「宇和郡御莊越前守降参記』

に、

天正十一年二月ヨリ明ル十二年正月マデ附城ニ在番シテ、間隙ナキ故ニ御莊越前守是非ナク降参シテ人質ヲ出シ和平ニナル。宇和郡ノ城持ノ兵將地利ヲ得テ城郭ヲ構へ、切所ヲ取テ戦ヲナス故ニ数年ノ間ノ戦ニハ勝ト云ヘドモ小身ナレバ力及バズシテ終ニハ領内ヲ侵掠ラレテ民庶困窮シ士卒疲労シテ、領内ヲ保守スルコト能ハズ、土佐方ヘ降参ス(略)故ニ黒瀬ノ西園寺ヲ始トシテ、白木、土居、金山、岡本、高森、板島、岩井ノ森等ノ城主皆人質ヲ出テ土佐方ヘ成ル。

とあることと混同して取り上げているのではあるまいか。天正十一年二月から十二月にかけては、長宗我部軍が次々と南伊予方面の山城を陥落させた時期であるので、安国寺恵瓊はこの戦況を見聞きして「眼前ニ河野殿ニ長曾我部每事仕勝候」と書き送ったものと思われてならないのである。湯築城が陥落したということはどこにも見当らないからである。しかるに、山本氏は『土佐物語』にある「通直は家臣の意見を入れてついに降伏し、家老平岡某を人質として岡豊に差し出したのであった」とあるのを取り上げて、河野氏が長

宗我部元親に降伏したと決定づけているのである。

実は、この『土佐物語』は宝永三年から正徳六年の作ある或いは安永五年から享保五年の作であるといわれるもので、天正十三年から百二十年以上も後世に書かれた『軍記物語』であるから、その内容を直ちに史実と見ることには問題があるろう。ちなみに、『群書類従』をはじめ『国史大辞典』類を見ても、その項目さえ掲載されていないので、史料としての価値は認められていないのではあるまいか。「河野通直が、秀吉の四国征伐軍の一翼として直接湯築城を攻撃した小早川隆景の勸告を受け降伏したとき、家老平岡治部少輔を人質として差し出したことが『予陽河野家譜』に明記してあるが、これと混同して『土佐物語』の筆者は記述したように思われるのである。肝心な降伏の時期を「十二年春」としており、「人質を平岡某」としているなど記述が実にあいまいであるから疑問はふくらむばかりである。

土佐側の史料である『長元記』（『長元物語』）に、

元親公仰セ二八、河野八中国元就ノ鞏ナリ。又来島八是モ元就ノ縁者ト聞ク、卒爾二

取懸レバ中国ヨリ加勢セハ大事也トノ御分別ナリ。ヨッテ河野殿分領ヘハ少シモ手ヲ指不申様ニト御家中ヘ被仰聞也。扱テ予州ノ国人御攻メヨセノ後。右両家モイツトナク土佐ヘ人質出シ御存分ニナルナリ。

とあることを見ると、長宗我部元親は阿讃伊の三ヶ国に兵力を分散して、苦しい戦闘を続けているので、中国の毛利氏を刺激しないため、縁戚である河野氏の領分内へは攻撃を行わないこととしていたのである。周囲の諸城を陥れたら湯築城は自然に降伏するようになるであろうと考えて、そうした戦法によったものと考えられるのである。

元親は賢明であったから、常に多数の兵力を消耗させるような無理な力攻めはしなかったようである。

しかるに『南海通記』は、

是故二天正十二年マデ懸テ漸々ニ攻伏シテ、中伊予中郡ハ河野家世々ノ領地ニテ大名ナレドモ、元親賢キ謀ヲ以テ某家臣ヲ誘引シテ、河野モ人質ヲ出シテ元親ニ降ズ。故ニ四国一統シテ、元親志ヲ遂ル也。

と述べているのである。これが真実であれば、湯築城を攻略して、長年にわたって念願の四国全土の制覇を成し遂げたクライマックスの戦闘であるから、その描写には力を入れるべきであろうと思われるのに、その目次を見ると、

予州宇和軍記。予州河原軍記。予州三間軍記。高森城発向記。予州北之川軍

記。再美間出陣記。奥宇和出陣記。御荘越前守降参記。

とあるのみで、湯築城河野氏降伏に関係するような目次はなく、僅かに「御荘越前守降参記」の末尾のところに、

河野モ人質ヲ出シ元親ニ降ズ。故ニ四国一統シテ元親某志ヲ遂ル也。

と述べているのみであって、実に拍子抜けがした記述となっているのである。

なお、土佐側の史料である『四国軍記』（『土佐軍記』）にも、

卷第六に、元親予州発向事。卷第七に、三瀧落城事。卷第八に、興居島合戦事。予州

大津城没落事^附菅田猶之義死事。元親予州再発事。高森合戦事。

とあるだけで、湯築城攻略のことに関する項目は記述されていないのである。

長宗我部元親の伊予攻撃軍は、湯築城とその周辺を残すのみとなって、あともう一押しというところで四国制覇は成るといふとき、秀吉の四国征伐の大軍を迎え討つ羽目になったというのが、長宗我部元親四国制覇の戦史の真実ではあるまいか。

九、伊予河野氏の出自と盛衰

四国制覇を賭けた長宗我部元親も、伊予の河野氏の領内に攻め入ることは躊躇していたのである。それは中国の雄毛利氏と伊予の河野氏は縁戚関係にあったので、河野氏を攻撃すれば毛利氏が援軍を送り込んで来ることは必定だったからである。

その伊予河野氏の出自については、従来いろいろな説が伝えられていて決し難いところであるが、河野氏研究の第一人者である景浦勉氏は、

従来、(1)孝霊天皇の皇子伊予親王の子小千命おちのみことから出たとする説。(2)紀伊氏から出たと

する説。(3)大山積神を始祖とする説。(4)吉備建彦命を始祖とする説。(5)源義親から出たとする説。などがあったが、いずれも問題があって、今日では鏡速日命（にぎはやひのみこと）の後裔である物部大小市連（もののおちのむらじ）から出たとするのが最も妥当である。

と述べているのである。以下、景浦説を中心にして、新しく発表されている研究結果をも折り混ぜながら河野氏の盛衰について紹介することとする。もし間違っておれば、それは筆者の受けとめ方の力量不足によるものであることを前もってお断りしておく。

河野氏は、古くは越智氏を称して越智郡を本拠地としていたことは、天平八年（七三六）の『伊予国正税帳』に、越智郡の大領に任ぜられた越智広国と、同郡主政に補せられた越智東人（あづまびと）らの名が見えているので知ることができるという。また、『続日本紀』の神護景雲元年（七六七）二月の条に、「同郡大領越智直飛鳥麻呂（おちのあたゐあすかまろ）が紘（あしぎぬ）および錢貨を献納した功によって外従五位下に叙せられた」とあるので、越智氏が開発領主として大規模な土地経営に乗り出していたことが推測し得られるとしており、なお、彼は国司とだいたい同等の位にあつたものと述べているのである。

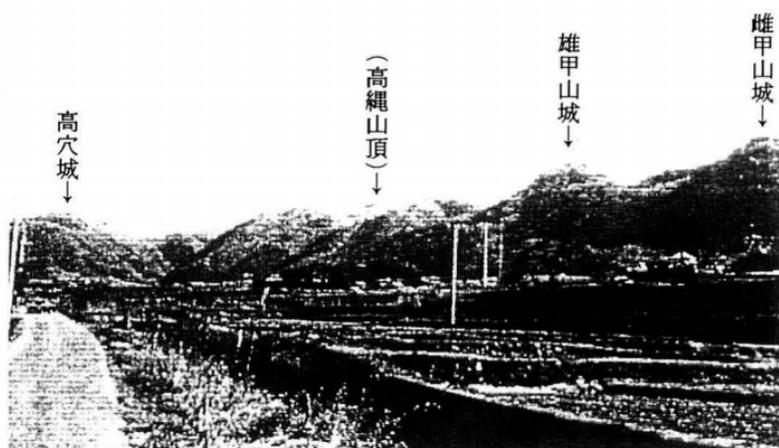
律令体制が弛緩し、瀬戸内海に海賊が横行するようになった頃には、その子孫は郡司のほかに追捕使に任ぜられており、さらに伊予掾、大目に補せられている。この間に次第に武士集団化していったのである。平安時代の末期には本拠を風早郡河野郷に移して高縄山城を築き、親清の時代になってはじめて河野氏を称したのである。

平安時代の末には、全国的に開発が奨励され荘園が激増した時期であるから、河野氏が国衛領であった河野郷土居を、本貫地にした開発領主として勢力を拡張していったのは当然であろう。

現在の善応寺は、その当時における河野氏の居館であったと伝えられており、実に見晴らしのよい高台に築かれている。前方



現在の善応寺全景



望遠山高縄より寺応善

には広大な風早平野が開けており、その向こうには瀬戸内海が青々と展望され、忽那七島や芸予諸島の島影が美しく絵のように浮かんでおり、背後には標高九百八十六メートルの高縄山がそびえ立っているのである。従来、ここに山城を築いていたといわれてきたのであるが、愛媛県教育委員会が、去る昭和五十九年から三ヵ年の歳月をかけて、県下全域の中世における城館跡を調査した結果、高縄山上には城の遺跡が全然見当らなかつたのである。その報告書を見ると、城名は高縄山となっているが、別称を「河野・神途城じんどという」とあり、備考欄に「高縄山に城跡はない。高縄城とは、雄甲おんこ・雌甲めんこ・高穴たかな・神

途^どの四城をさし、広義には風早全域の城を含めた呼称である」と明記してあるので、今までの認識を改める必要がある。

また、川岡勉氏の研究によれば、応長二年（一三二二）の『大山積神社造営段米支配状』によって、「風早郷の国衛領」を見ると、那賀郷・風早本郡・河野郷が併記されているので『和名抄』に見える風早五郷のうち河野郷は郡から自立して国衛に直結していたことが読み取れるので、「河野氏はおそらく河野郷の郡司として、国衛勸農権を分有しながら開発を進めていったものと考えられる」と新しい解釈を提示しており、「在地領主の本拠地としては絶好の位置を占めているこの地域を押さえながら政治的な飛躍を成し遂げた」と述べている。

源平時代になると、河野通信は西下した源義経の軍を援けて御家人となり、国内における家臣団を構成した。「承久の乱」のときは後鳥羽上皇側に与したため高縄山城は攻略され、一時は苦境に陥ったが、通信の孫智真（一遍）は逆境の中にあって成長し、苦闘を重ねた末に、革新的な性格をもって念仏宗を布教し、のちの時宗の基礎をつくっているのである。

河野通清の時代には^{げん}元の来寇^{らいこう}があつて九州志賀島での戦いで殊勲をあげ、後醍醐天皇が起こした^{げん}元の乱^{らい}のときに通盛は幕府側に応じたが、新田義貞の攻撃によって鎌倉幕府が滅亡したので、仏門に入って隠棲^{いんせい}していたのであるが、足利尊氏に見する機会を得て忠節を誓つて以後本拠を河野郷から温泉郡の湯築城に移して勢力の挽回に努めた。

この湯築城を築いたのは従来建武年間（一三三四～三八）としていた説は江戸時代に編纂された地誌などによるものであつて、確証があつてのことではないとし、宝永七年（一七一〇）に成立した『予陽郡郷俚諺集』に湯築古城の説明として「河野九郎左衛門通治、後善恵と号す。其後代々住之」と記されており、さらに「柿の木谷の辺より古城の辺迄昔は山続也。是をすべて伊佐爾波の岡と云へり。河野殿城を築るゝ時、山を切開き堀をほりける故、今別のように見ゆる也。」とあつて、この説の真偽は定かでないが、ここに築城が建武年間であるとは記していないのである。しかるに、これから百年以上も経過してから成立した『伊予古蹟志』や『予陽塵芥集』には「建武年間に建築された」と記しているが、その根拠は示されていないので疑問であると川岡勉氏は問題を提起されているのである。

その上、恩顧の家臣団の内訌と在地勢力の反抗が絶えなかったため、内憂外患に悩まされ続け、河野家は弱体化していったのである。

外部に対しては細川氏の侵入に備えるために大内氏と連合を続け、やがて毛利氏の権勢が強大になると毛利氏と縁を結んで提携を行い領国の安全を期することとした。明応九年（一五〇〇）正月、河野教通が湯築城で逝去し、そのあと宗家を統率したのはその子通宣（刑部大輔）であったが、予州家の通春の子通篤たちと宗家との争いは相変らず続いたのである。

通宣が同十六年（一五一九）七月、野間郡来島城（現今治市）で病没し、そのあとを継いだのが、その子通直であった。通直は通称を太郎といい、のちに弾正少弼に任ぜられたが、河野氏の統率力は次第に弱体化していっただけでなく、恩顧の部将の中にも、正岡・重見氏のように離反していく者があったので、通直はそれらの討伐に奔走するという状態であった。通直は幕府との交渉を重ねて、天文二年（一五三三）には將軍足利義晴の相伴衆に加えられたが、衰退期にあった河野氏は將軍の権威をかりて勢力を挽回しようとした

ようである。同十年（一五四一）六月、大内義隆の家臣白井房顕が、十月には同じ家臣の小原隆言が大三島を襲撃した。それは河野氏の配下の水師が大内氏の命に従わなかったの
で、彼等は大三島を占領する計画をもっていたようである。大山祇神社の大祝安舎おほはかりやすいえは防戦
に努めるとともに、通直の命によって出陣した村上・今岡氏らの援軍と合同して撃退した
のである。

× × × × × × × × × ×

これより先、通直の継嗣問題から河野家は宗家と予州家の両派に分かれて内訌を起こした。通直には嗣子がなかったので、村上通康に家督を譲ろうとした。通康は村上三家の一つであって、津島城を根拠地とし、水師を統率して勢力があり、通直が最も信頼を寄せていた女婿である。ところが、他の家臣団はこれに反対し、予州家の通政を迎えることを主張して譲らなかつた。そこで、宗家の家臣団は機先を制しようと通政を奉じて湯築城に入り通直を追放するという強硬手段をとった。

このため両派の争いは、いつとき激化したが、やがて和解が進められて「通直は通政を

後継者とする」という条件で和議が成立し、通直は家督を継ぎ、のち將軍義晴の諱の一字をもらって晴通と称した。だが、同十二年（一五四三）四月に病死した。若年であったため嗣子がなかったので通直があとを継ぐことにしたが、まだ幼少であったので通直が政務を担当することにしたのである。

同二十二年（一五五三）に、久万山の大除城主大野利直が反抗したが、河野氏にはもうこれらの部将たちを鎮圧する勢力はなくなっていた。その後、通直は病氣になり嗣子がなかったので、弟通生の曾孫にあたる野間郡池原館やかた（現菊間町）の牛福丸（当時五歳）を迎えて養子とし、永禄十一年（一五六八）二月に宗家を継がせたのである。牛福丸は翌年に元服して通直と称し、兵部少輔伊予守に補せられたが、若年であったので、実父通言が見人となって政権をとったのである。

このように悪条件が重なって勢力が弱体化したので、河野氏は戦国大名に成り得なかったのである。来島の村上氏が不穏な行動をとるようになり、通康の子通総は幕命に反するばかりか通宣の諭旨にも応じないという有様であった。

天正十年（一五八二）六月二日、突如して起きた「本能寺の変」をいち早く知った秀吉は、備中から反転して姫路を経由し、九日には摂津に到着するという迅速な行動をとったので、「中国の大返」と称して各武将たちの度肝を抜いた。十二日、摂津富田の陣所に、信長の三男信孝を迎えた秀吉は、信長の四男於次を養子にもらっており、これで弔い合戦の名分は十分整ったことになった。

翌十三日、摂津の国境山崎くによさかいで明智光秀軍と激突し、午後四時頃戦端が開かれたが、二時間後には明智軍は壊滅したのである。光秀は近江の坂本へ逃れようとする途中、京都伏見の小栖で土民の槍に突き刺された。武運の尽きたことを悟った光秀は自刃したのである。

巧みに丹波長秀・池田恒興らを籠絡した秀吉は、清洲会議の席上で柴田勝家の意見を封じ込んで、自分が操りやすい三法師を織田信長の相続人に据えることに成功した。苦汁を嘗めさせられた勝家は織田信孝・滝川一益らと結んで秀吉に抵抗したが、秀吉は勝家が雪深い本拠越前北ノ庄から動けない隙について、信孝・一益を個別攻撃し、信孝を降伏させた。天正十一年（一五八三）に入ると一益が反撃し、閏正月には信孝が再び挙兵し、三月



北ノ庄城址

上旬に勝家が二万数千の軍勢を率いて江北へ進出してきた。これに呼応しようとする信孝を討つため秀吉が美濃の大垣へ向かうと、四月二十日勝家の甥佐久間盛政が大岩山砦を攻略し、秀吉の属将中川清秀を討ち取ったのである。

大垣から急転した秀吉は二十一日の朝、賤ヶ岳北峰で柴田勝家方の軍を突き崩し、一挙に勝家軍の本隊を壊走させ、さらにこれを追撃して二十四日に勝家と夫人お市を自刃させたのである。

強引に勢力の拡大を図っていく秀吉に対し反感を抱いていた徳川家康と織田信雄のぶかつは尾張

小牧山に布陣した。秀吉は犬山について楽田に本陣を構えて対峙することにした。小牧長久手の戦いは、初め家康側が優勢であったが、秀吉は巧みな外交手腕を発揮して、信勝と単独講話を結んだ。そのため家康は出兵の大義名分を失うことになったのである。

天正十三年（一五八五）三月には紀州に軍を進めた秀吉は根来寺衆徒・雑賀一揆を鎮圧し、翌四月大田城を水攻めで陥落させ紀州を平定したので、六月には秀長を総大将として長宗我部元親を平定するための大軍を四国にさし向けることにした。

これより先、四国では讃岐の引田城に立て籠っている仙石秀久二千の軍勢に対し、元親は二万の大軍を差し向けて陥落させていた。五月一日付の仙石秀久に宛てた秀吉の書状に、「長宗我部元親……打ち果たすべく候云々」とあるので、秀吉は早くから軍事行動を起す計画であったことがわかるが、先に述べたように、畿内で徳川家康が織田信雄と手を結んで秀吉に戦いを挑んできたので、四国へは手が回らなかったようである。秀吉が「小牧・長久手の戦い」に全力をあげている間に、元親は讃岐と伊予の大部分を征服したのである。

秀長に元親の討伐を命じた当初は、「今、即座に矛を収めれば、讃岐と伊予は返上させ

るが、土佐と阿波の二国は安堵する」という条件であったのに、元親は重臣の谷忠兵衛忠澄を秀吉のもとへ出向かせて「伊予一国の返上には応じるが、それ以上は応じられない」と強気の交渉をしていたので決裂となっていたのである。

天正十三年六月十六日、秀吉は本格的な四国征伐の戦いを開始した。秀長は三万の軍勢を率いて堺から出帆し、淡路の洲本に渡海した。甥の秀次は三万の軍勢を率いて明石から淡路に渡って秀長の軍と合流し、鳴門海峡を渡って阿波の土佐泊に上陸した。

また、宇喜多秀家、蜂須賀正勝・家政父子、黒田孝高よしたからの軍二万三千は屋島に上陸した。さらに、毛利輝元は小早川隆景・吉川元長らの四万の大軍を新間・氷見・今張に上陸させて攻撃を開始した。

秀吉の四国征伐軍は元親が予期した戦略とは雲泥の違いがあって、讃岐・阿波・伊予の三カ国が同時に攻撃を受け、総勢十二万三千という大軍の前に、元親の四万の軍ではどうしようもなかったのである。緒戦から苦戦の連続であった。牛岐城の香宗我部親泰と渭山城の吉田康俊は城を捨て置いて土佐へ逃げ返るといふ始末で、元親は重臣たちの意見を受

け入れて、遂に秀吉の征討軍に降伏したのである。『南海通記』に、

上方の軍兵は富み栄えたること、四国の相対すべきことに非ず。此四国は廿年の兵乱に因て民屋を放火し村里を打破り田野を芒所し五年三年の間には耕作農業も整わずして五穀充満することもなからん。民疲れ諸卒倦て兵具馬具も切れ腐りてかかりたる物なし。田牛行馬も瘦衰へて上方に対すべきやりなし。

と、谷忠澄の言葉が伝えられている。一領具足の長宗我部軍と、この時代の最先端を行く先進地の当世の具足とでは比較にならないので、征伐軍と戦っても勝目がないばかりか、戦いによって農地が荒らされ住民が苦しむばかりで何ら益することがないことを縷々述べているのである。

谷忠澄は通称を忠兵衛といつて、もと土佐国一ノ宮土佐神社の神官であった。智謀がすぐれていたので、長宗我部氏の外交を担当していた。秀吉の四国征伐のとき、阿波の宮城で秀長の軍と対峙した時、これ以上対峙することの不可能なことを悟り、元親に和睦を進言して怒りを買ったことがあったが、結局は目的を果たし秀長と和議が成立することに

導いた影の功労者であった。

秀吉は、柴田勝家や徳川家康に味方した元親を許すことができなかったが、元親に土佐一国を安堵するという寛大な措置で終止符をうった。

翌年の十二月、秀吉の命令を受けて元親は島津家久の討伐に参陣したが、軍監・仙石秀久の誤断もあって大敗北はいぼくを喫した上に嫡子信親を戦死させてしまった。信親は前途有望の青年武将で、元親の期待も大きかっただけに、その落胆は大きく人間が変わってしまったのである。四男盛親を溺愛し、家督を継がせようとして重臣たちに反対せられると切腹を命ずるなど失政が目立つようになった。

小田原攻めや朝鮮の役にも出陣したが、ますますノイローゼがこうじて三男親忠を幽閉するなどの暴挙があったが、慶長四年五月、伏見で死没した。そのあと盛親が家督を継いだ。関ヶ原の合戦で西軍に属し戦わないうちに敗北し、わずか一年で大名を浪人するという憂き目にあった。雌伏十四年、豊臣方に迎えられるが、夏の陣で藤堂高虎の軍と戦って敗れ、京に潜伏していたが捕えられ斬首された。まことに不運な浪人大名の最後であった。

一一、浮嶋神社兵燹説の虚構

四国全土の制覇を賭けた長宗我部元親が伊予国に侵入して来たとき、浮穴郡牛渕村（現温泉郡重信町大字牛渕）に乱入し、浮嶋神社と道音寺を焼き打ちにしたという説がある。

大正五年に刊行の『新編温泉郡誌』の南吉井村「浮嶋神社」の項に、

天正十四年長宗我部元親当国に乱入の際、社殿旧記兵燹に罹りしを慶長年中加藤嘉明神殿を再興し、三島神社と称へ、菖蒲祭の古式を復旧す。

と記載されており、さらに続いて「同村道音寺」の項にも、

天正年中兵火に罹り堂宇悉く焼失す。その後、水害あり天和年中今の地に移す。旧地には伽藍什器焼け残りのものを埋め置く。今、その処を経塚と称すという。

と記載されている。これが『新編温泉郡誌』の普及と共に一般に知れ渡ったのであろう。

しかるに、牛瀧村隣接の野田・田窪・西岡の村々をはじめ、その周辺の各市町村誌を調べて見ても、長宗我部軍が侵入し兵燹にかかったという形跡は見当らないのである。仮に、長宗我部軍が牛瀧村に侵入したのが事実であるとしても、浮嶋神社と道音寺だけが焼き打ちにあって、その外は何らの被害がないということは不自然であるから疑問は消えないのである。

この際、徹底的に調査をするため、明治二十七年（一八九四）に刊行した宮脇通赫の著書『伊豫温故録』を繙ひもといてみると、「道音寺」の項には、前書と同じことが記載されているが、「浮嶋神社」の項には、長宗我部軍の兵燹のことは全然記載されていないのである。これでは疑問は膨らむばかりであるので、宝永七年（一七一〇）発行の『予陽郡郷俚談集』、文化年間（一八〇四～一八）発行の『伊予二名集』、慶応二年（一八六六）発行の『愛媛面影』を調べたが、その片鱗へんりんさえも記載されていないのである。

こうしたとき、今から凡そ二百二十年ばかり以前に書かれた明和年間の『伊予松山浮穴郡村々諸神社附』と表記してある調書を見る機会を得た。その中に相原能登が書いている

水田三町六反御寄附島国印
 頂戴器有候処天正十四年長
 曾我部宮内少輔元親公當国江
 乱入之節社並御記録御宝物悉
 被焼討社定之同喜焼失仕候故
 往古傳ル処ノ書類無御座他傳
 ル処左記尤右神領モ福嶋左衛門
 太夫正則公御代悉被召上只今地
 而已相發申候慶長年中加藤様
 御代至仮小社造營此節三嶋大
 明神浮島神社同殿奉鎮座

「浮嶋神社由緒」の一部（相原能登筆）

「浮嶋神社の由緒」がある。その一部に、

天正十四^成年、長宗我部宮内少輔元親
 公当国江乱入之節、社並御記録御宝物
 悉被焼討、社宅モ同事ニ焼失仕候故往
 古ヨリ伝ル処ノ書類無御座、他ニ伝ル
 処左ニ記ス尤モ右神領モ福嶋左衛門太
 夫正則公御代悉被召上只今地名而已相
 殘申候。慶長年中加藤様御代ニ至仮ニ
 小社造營此節三嶋大明神浮島神社同殿
 二奉鎮座。

とある。これは現存する「浮嶋神社の由緒」の公式文書としては最も古いものであるか
 ら、長宗我部軍による浮嶋神社兵燹説はこの調書を根拠としたことは間違いあるまい。

従って、この由緒の真偽が長宗我部軍の侵入兵燹説を解く鍵となるのである。

そこで、土佐側の史料である『南海通記』を開いてみると、「長宗我部元親降参記」に、天正十三年五月十九日土佐ノ元親降参ノコト、大和秀長卿ヨリ谷忠兵衛ヲ招キ和親ノコトヲ計玉フ故ニ元親納得シ方無事ニ成リ秀長卿ヨリ泉州内府公ヘ註進アリ。土佐一國ヲ元親ニ賜テ御朱印ヲ下シ玉フ。是ニ因テ国民マデ安堵シ、四國ノ兵革止テ元親阿州大西ヲ去テ土州ニ還リ、三ヶ國ノ兵衆悉ク土州ヘ引取ル。元親嘗テ十年ノ成功ヲ以テ三ヶ國ヲ攻摩^{せめなび}ケ、名家ヲ破リ衆命ヲ損フ幾千人ゾヤ誠ニ無益ノ作業トナリヌ。とあり、また、『長宗我部元親年譜』に、

天正十三年七月二十五日、元親白地の本營に在り、諸方面の不利を察して秀吉に降る。秀吉元親に土佐一國の領有を許す。天正十四年、上坂して秀吉に謁し、年賀の儀を修む。十月秀吉の命により、元親・信親父子九州に出兵。十二月十四日豊後戸次川に島津氏の軍と戦い信親以下七百余名戦死。

とあって、長宗我部元親は既に天正十三年（一五八五）に秀吉に降伏しているの、その翌十四年に伊予に侵入して浮嶋神社を焼き打ちにすることは不可能であることは明らか

である。

なお、小早川隆景が九州筑前国に転封となったあとの湯築城へ入った福島正則が「浮嶋神社ノ神領ヲ悉ク召上」とあるが、これも真実とは思えないのである。

秀吉は小早川隆景を筑前国に移封させたあとの伊予へは、福島正則と戸田勝経を入封させて分治させたのであるが、秀吉は兩人に対して、(1)法度を厳守し、かつ農民に対して都合な振舞をしないよう心掛け、(2)勝経の所領と境界を接しているから、紛争が起こっても協議によって解決し、(3)規則を遵守して勝手な行動に出ないように、と厳しく訓戒を与えているのである。京都大学所蔵文書「秀吉朱印状」に、

条々

一、下々法度之儀堅申付、百姓以下ニ少も非分之儀下ニ申懸一、所務等儀有様可ニ申付一事、

一、民部少輔申付候内ニ自然堺目等下々申事雖レ有レ之、左衛門大夫罷越、身ニ請精を入、可ニ馳走一候、又左衛門大夫申付候内ニ有レ之共、民部少輔罷越肝を煎、

可ニ馳走一候、少も如在を仕、手前さはきニ仕候者、可レ為ニ曲事一候、

一、被ニ仰出一候御用等之儀互申談、守ニ御錠旨一無ニ由断一可ニ申付一事、

一、九州四国之かなめ所ニ候間、先々儀切々人をも遣、守届可ニ言上一事、

一、居城其外立置候城々普請無ニ由断一申付、応ニ知行一人數可ニ相抱一事專一候。

九月八日 (秀吉朱印)

福嶋左衛門大夫とのへ

とある。秀吉は天下統一のためには、征服地の治安維持には格別の注意を払ってきたのである。

福島正則は湯築城に入ったけれども、ほどなく越智郡国分城に移っているのである。福島正則は秀吉と縁戚にあり、人物も立派であったので「浮嶋神社の神領を没収した」というのは虚構であろう。万一、福島正則が秀吉の訓令に反して神領の没収をしていたとすれば改易されていたであろうからである。

× × × × × × × × × ×



場 戦 古 岳 ケ 賤

福島正則は永禄四年（一五六一）に尾張国海東郡二寺村で福島正信の子として誕生した。母は秀吉の母（おおまんどころ大政所）の妹であって、幼少の時から秀吉に仕えていた。播磨三木城、因幡鳥取城を攻め、山崎の合戦に参加し、天正十年九月には五百石を与えられている。同十一年賤ヶ岳の戦いでは七本槍の筆頭に数えられ五千石に加増されたのである。

次いで、小牧・長久手の戦いや紀州さいが雑賀征伐の戦いで戦功があって、伊予国五郡十一万三千二百石を賜ったのである。九州征伐、小田原の役、文禄・慶長の役を経て尾張清洲城主二十四万石の大名になり、関ヶ原の合戦で

は東軍に属して先鋒を勤め、その功によって安芸国広島四十九万八千二百石の大大名となったのである。

伊予在任中には、深く神仏を崇め石鎚の常住に宿坊を建てて、ここに籠って祈願しており、また、土地百石を伊勢神宮に寄進した敬神家としても知られている人物である。「浮嶋神社の神領を没収した」というのは事実無根むこんの冤罪えんざいである。

「天正十四年に長宗我部軍によって焼き打ちにされて焼失した神殿」を、単なる「仮の小社造営」に「加藤様御代」まで十数年間も放置しておいたことも事実性に欠けるものである上に、なお、現在の浮嶋神社の神殿は慶安三年（一六五〇）の造営（同神社棟札・渡部涉著『牛瀨部落の史的考察』）であるから、『新編温泉郡誌』にいうように「加藤嘉明の再興」であるとすれば、僅か四十年から四十五年しかもたなかった粗末な建造物ということになって、到底領主加藤嘉明が再興したものとは考えられないものとなる。事實は正にその通りであって、明和年間の調書には「慶長年中加藤様御代二至小社造営」とあって、「加藤嘉明の造営」ではなかったのである。この真実の判明により「加藤嘉明神殿を再興」

と書き換えたのは、浮嶋神社の由緒を美化するための虚構であることが明らかになったのである。

明和年間の調書にある「此節三嶋大明神浮島神社同殿ニ奉鎮座」とあることも不可解である。三嶋大明神の神殿は焼失してもいないのに、なぜ浮嶋神社と同殿に祀ったのであるか。新しい『重信町誌』の浮嶋神社の由緒には、

戦国時代大友義鎮（宗鱗）の当国侵入にあたり、大三島神、八幡神以外の神社は焼却するとの風聞により、浮嶋神社を大三島明神と改称した。天正年中兵火にかかり社殿炎上し古記録等焼失。慶長年間加藤嘉明により社殿再建。三島宮と称し、菖蒲祭の古式を復旧す。

となっており、先の由緒の内容とは全く違ったものになっている。これはどうしたことであろうか疑問とするところである。三島神と八幡神を祭っている神社以外のものは、この周辺だけを見ても数十社に及んでいる。しかるに「神社の名称を変えたり、焼き打ちにされたという神社」は皆無である。

従って、浮嶋神社だけが唐突に焼き打ちにされると称して神社名を改称したという説は信憑性のないものである。故意に由緒をつくり替えると歴史を混乱させる罪を犯すことになり極めて遺憾である。

× × × × × × × ×

大友宗麟は享禄三年（一五三〇）豊後国の豪族、大友義鑑よしあきの嫡男として誕生した。幼名を塩法師といい、諱を義鎮よしぢんと称した。宗麟は剃髪後の名である。その出自は鎌倉時代の初期、能直よしなおが豊後国守護職に任命されてからはじまるという。南北朝時代、北朝に属し、以後勢力を伸ばし豊前・筑後の守護も兼ねる守護大名に成長した。

義鎮よしぢんの祖父義長の代に戦国大名に衣がえしているが、父義鑑が天文十九年（一五五〇）家臣に斬られて没すると、義鎮は事変（二階崩れの変）の首謀者田口・津久見を討って家督を継いだ。その翌年、長年争っていた大内義隆が家臣の陶晴賢すえはるかたのために自害する。陶氏の要請もあって弟晴英が大内氏を継ぎ、義鎮は大内氏旧領の豊前・筑前をまたたく間に制圧し、永禄六年（一五六三）臼杵丹生島に城を築いて、ここに住み、府内には世嗣義統よむむねに

住まわせた。この制圧には鉄砲が大きく貢献しているのである。

義鎮は早くから鉄砲の威力を知り、その製造にとりかかっていたのである。永禄二年（一五五九）将軍足利義輝から、豊前・筑前の守護に任命され、同五年には宗麟と号した。だが、陶晴賢を破った毛利元就の軍勢が、旧大内領の回復と称して豊前国に進出してくるので、たびたび毛利氏との争いが絶えなかったが、元亀二年（一五七二）将軍足利義昭の斡旋あっせんにより和を講じた。その間に龍造寺隆信を攻略して降伏させた。

また、元亀三年（一五七二）伊予国宇和島の西園寺公広きんひろが、土佐国の一条康政と戦うと、宗麟は女婿康政のため援軍を出した。ここに宗麟は豊後・豊前・筑後・筑前・肥後・肥前そして日向・伊予の南部を領する強大な戦国大名にのし上がったのである。

宗麟の居城である臼杵ならびに府内は、ともに別府湾に臨む良港として、かねてより諸国の商船の出入りが多かったが、天文十二年（一五四三）以後ポルトガルや明みん（中国）の船がしばしば来航し、宗麟も歓迎したので、多数の宣教師が来朝してキリシタン伝道の本拠ともなった。宗麟はキリシタンに好意を寄せ、宣教師を保護したが、天文六年（一五七

八) みずからも受洗し教名をフランシスコといった。

イエズス会のザビエルを府内城(現大分市)に招き布教を許可するが、宗麟の目的は南蛮貿易にあり、大砲や火薬はもちろん象や孔雀くじやうまで輸入した。また、府内にコレジオ(学林)、白杵にセミナリヨ(修業所)を、さらにノビシアド(修練所)を設置した。

天正十一年(一五八二)に宗麟は近隣のキリシタン大名の有馬晴信、木村純忠とともに日本最初の「少年遣欧使節」をローマ法皇のもとに派遣したのである。他方、改宗とともに領内の仏寺を破壊し、彦山諸院を焼き打ちにしたが、元龜三年(一五七二)、島津義久に敗れた日向の伊東義裕が亡命してくる。ここで勢力の拡大を期する島津氏との一戦を決意した宗麟は、四万五千の大軍を率いて日向路を南下、島津軍二万五千と戦ったのであるが、宗麟は遙か後方で礼拝三昧さんまいにふけていた。しかも日向にキリシタンの理想郷をつくる計画に没頭していたため、将兵の意気はあがらず「耳川の合戦」で大敗北を喫したのである。

この合戦を契機として、九州一の威勢を誇った大友氏は衰退の一途をたどった。もとも

と家臣団の結束が弱く、離反者も多かっただけに崩れかけると止まらなくなり、配下の龍造寺氏も自立し、島津氏も北上して、天正十四年（一五八六）には宗麟の居城、臼杵丹生島城に迫った。このとき、輸入した大砲が起死回生の威力を発揮して島津軍を追い払ったが劣勢はおおいがたく、上洛して秀吉に泣きついたのである。

秀吉の九州遠征のおかげで、嫡子ちやくし義統に豊後一国が辛うじて保証された。宗麟も秀吉から日向国を隠居料として与えられたが、これは辞退した。翌天正十五年（一五八七）五月、津久見で病没した。五十八歳の波乱の生涯であった。

一一、湯築城の降伏と小早川隆景

長宗我部元親軍の掃討を決意した羽柴秀吉は、中国の毛利氏に対して出兵を要請した。これを受けた毛利輝元は小早川隆景に伊予へ出陣を命じたのである。しかるに、隆景はいっ



小早川隆景像（米山寺藏）

こうに動こうとしないのである。

瀬戸の鷹と異名をとった隆景は度々秀吉と交渉を重ねて「降伏させたあとの伊予を所望したい」と約束をとりつけていたのである。実に驚くべき豪胆な交渉である。

「天下人」を目指す秀吉は、将来のことを思うと、毛利氏一族の力を余り強大にさせることは本意ではなかったが、目前に迫っている四国征伐のためには、現実的判断に秀でた弟秀長の意見を受け入れて、秀吉は小早川隆景の申し入れを承諾して書類に署名した。『小早川家文書』の中にある朱印状に、

今度長曾我部阿波讃岐致返上、実子出之、子共在大坂させ可致奉公与申候間、既人質雖請致候、伊与儀其方御望事候間、不及是非、長曾我部人質相返候上、伊与国一職仁

が、元就を助けるに足る力のあるのは長男の隆元と次男の元春と三男の隆景の三人であった。

ところが長男の隆元は早く病死したので、頼りにできるのは元春と隆景の二人だけとなったのである。その当時、勢力を伸ばしていたのが名族吉川氏きよかわであり、瀬戸内方面せとうちで勢力の強かったのが小早川氏であった。

これに目をつけた元就は元春を吉川家へ、隆景を小早川家へ養子に入れて勢力の拡大を図ったのである。後に、「毛利の両川りょうせん」といわれて、毛利家の躍進を支える二本の強力な支えの勢力となったのであるが、史伝類の書物には、「群臣切に懇請してやまず」とあって、吉川・小早川の両家からは是非養子にもらいたいと頼んできたので、元就がその願いを聞き入れて承諾したように書いてある。しかし、毛利家から養子を迎えることに反対していた吉川・小早川両家の家臣たちが次々に誅伐せられているところをみると、元就の謀略によって両家を乗っ取ったというのが真相のようである。

隆景が養子に入った小早川家は、沼田・竹原両荘一帯の地頭を務めた家柄であった。後

に所領を分けて、沼田小早川と竹原小早川の二家を起こしたのである。ところが、沼田小早川家の当主正平まさひらは戦死し、嗣子繁平は失明したので、当主にふさわしくないということ
で、天文二十年（一五五一）隆景が沼田小早川家をも継ぐことになったのである。

この時のやり方は、強引過ぎるほど強引で反対した家臣たちは悉く殺され、繁平は剃髪ていはつして教信寺に入ることと漸く決着したという経緯をたどっている。こうして、小早川家は一本化するわけであるが、隆景が竹原小早川家に入ったのは十二歳のときであったから、うしろで毛利元就が画策したことはいうまでもあるまい。

毛利氏がこれほど画策までして小早川氏を配下にした目的は、現在の三原市から沼田川の流域までの瀬戸内一帯の島々を制圧していたのが小早川水軍であったから、それを手中に収めるためであったのである。この裏には元就が忍者集団の世鬼せき一族を使って小早川家に争乱を起こさせたという説がある。後世、毛利氏が作成したという史書に、

元春・隆景のこと、他名の家を継がることに候。然りといえども、これはまことの当座のものにてこそ候え、毛利の二字あだおろそかに思召しおぼしめ、ご忘却候では曲くせなきこと

に候。

とある。つまり、「吉川といい小早川というのも、それは便宜上のことであって、毛利のためであることを片時も忘れるでないぞ」と教訓を与えていることを見ても明らかである。

毛利家の陸軍は吉川元春が総大将となり、海軍は小早川隆景が総司令となって、車の両輪のように互いに提携し合って諸国を次々に征服して領地の拡大を図っていたのである。陶晴賢すえはるかたが率いる二万の大軍を高島に襲撃したとき、元就は謀報戦略をもって陶晴賢軍を芸の宮島に集結させ、嵐の暗夜に乗じて渡海し敵の本陣を背後から一挙に攻撃したので、毛利軍は僅か三千ばかりの軍勢であったが夜の明けぬうちに勝敗を決することができたのである。陶晴賢は逃げ場を失い、岩陰に入って自刃した。毛利軍が討ち取った敵の首は四千七百と記録されている。

毛利水軍は隆景を中心にして瀬戸内海を支配したが、当の隆景は至って温和な人物であったといわれている。豪雄で知られたのは吉川元春であるが、弟の隆景には一目も二目も置

いていた。備中高松攻めの時、和睦が成立したのは秀吉の詭計きけいによったことを知った元春が、「直ちに追跡して秀吉を討ち取ろう」と強く主張したのであるが、隆景は「和睦の誓紙の血判が乾かぬうちに約束を破るのは武士の道にもとる。それよりも、ここは追跡をせず、毛利家の将来のために秀吉に貸しをつくっておこうではないか」と言って、はやる元春を押し留めたのである。

この事があって以来、小田原の北条氏討伐の時には隆景は重用され、その献策が功を奏したのである。秀吉が天下人となったとき、隆景は毛利家の当主輝元（元就の孫）・徳川家康・前田利家（のち利長）・宇喜多秀康らと並んで五大老に列しているのである。秀吉への貸しは大きな利息がついて戻ってきたことになったのである。

毛利氏の宗家である輝元には後継者がなかったので、秀吉惟幕の臣黒田孝高よしたかが内々で隆景に「輝元殿は四十歳になろうとしているのに子どもがない。秀吉の甥おひ金吾秀秋を養子に迎えてはどうか」と話を持ちかけてきた。秀秋は当時十歳であったが、気位が高く気性が激しい少年であるとの噂うわさがあったので、隆景は毛利家の血統が絶えるだけでなく、彼の気

性のために毛利家が破滅するのではないかと心配のあまり輝元と相談をして、急いで元就の庶子徳田元清の子秀元を毛利家の継嗣と決めておいて、「輝元の養子は既に決定しているので、金吾秀秋は小早川家の養子に是非迎えたい」と願い、数百年続いた名族毛利家の血統を守るために小早川家を犠牲にしたのである。

金吾秀秋は秀吉の正室高台院の兄木下家定の第五子であって、母は杉原七郎左衛門家次の娘である。天正十年（一五八二）、おおみのくに近江国長浜で生まれ、幼名を辰之助と言った。幼少の頃から秀吉の養子となり、高台院の膝下しっかで養育され、天正十三年（一五八五）秀吉が関白になったとき辰之助は十二歳で元服し、羽柴秀俊と名乗っていたが、同十九年参議に任じ右衛門督を兼ね従四位に叙せられたので、「金吾」とよばれることになった。次いで丹波亀山十萬石を与えられ、文禄元年（一五九二）権中納言に進んで左衛門督さへもんのかみに転じ、従三位に叙せられて丹波中納言と称するようになった。

文禄二年（一五九三）三月、朝鮮の役に際しては肥前国名護屋なごやに出陣していたが、八月に秀吉の側室淀に捨丸（秀頼）が生まれたので、秀秋は養子に出される運命となったので



小早川秀秋像（高台寺蔵）

ある。その秀秋は小早川隆景の養子に迎えられ、文禄三年十一月に備後国三原城おもしろに赴いて輝元の養女と結婚式を挙げたが、同四年には関白秀次の事件に連座したため丹波の所領は没収せられた。隆景が三原城に隠居するのと同時に、旧領の筑前一国と築後の一部を与えられた。隆景は慶長二年（一五九七）六月、六十五歳のとき急死した。秀秋は同年七月、朝鮮再征軍の総大将に任ぜられ、釜山に渡って翌年正月蔚山うるさんの戦いで自ら先頭に立って奮戦

し大いに武名を挙げた。ところが、総大将としては軽率な行為であるとの科とがで帰国を命じられ、四月には筑前を取り上げられ、かわりに越前北ノ庄を与えられた。しかし、秀吉の没後、「秀吉の意志に基づいた」ということで五大老から筑前・築後の旧領が与えられたのである。その裏では徳川家康の働きかけがあったといわれている。

秀秋は早くから家康と心を通じていたので石田三成

堅武将となった。やがて領主を凌いで宇摩・新居両郡を支配するまでになった。

天正十二年（一五八四）、高峠城主石川備中守通清が病死したので、八歳になったばかりの虎竹丸が後を継ぎ、後見役には親戚関係にある横山城主近藤長門守尚盛がなったが、実権は虎竹丸の姉婿の金子元宅が握っていたのである。

秀吉の命令を受けて四国征伐軍の一翼を担って出陣した小早川隆景が率いる第一軍は天正十三年六月十七日、今張浦（今治）に上陸し東禅寺に本陣を置いた。七月五日には吉川元長・宍戸元秀・福原元俊らが率いる第二軍が新間（新居浜）と氷見ひみに上陸し、土居城・岡崎城を攻略し、金子城に迫って、元宅の留守をまもっていた弟の元春を攻撃し、七月十日に陥落させた。この時、金子元宅は高峠城に入って諸将を集めて軍議を練っていた。その時、最長老の近藤長門守尚盛が毅然とした態度で、「あまねく天の下皆王土である。今、豊臣秀吉朝命によって天下統一の任に当たっている。大勢は既に秀吉に有利になっているので、いかでかこれを敵とせん。速やかに軍門に降って主家の安泰を図り、また我等の再起を期せん」と、声を大にして意見を述べたが、誰一人として声を発する者はなかった。

この様子を見ていた金子元宅は、「長門守の意見はもつともである。秀吉の軍門に降れば主家の安泰は期し得られようが、我等は早くより長宗我部元親と結び、攻守同盟を誓い、またその変わらざることを神明に誓って起請文を交わしている。しかも、主家を始め我々諸將に至るまで人質を土佐に送っているではないか、武夫は名をこそ惜しむべきで、身命を全うすることを願って義を捨て節を曲げるべきではない。世の中に義理を知らざる者ほど哀れである者はない。また、卑屈にして怯懦きょうだなる小身の武士程浅ましい者はない。昨日は長宗我部に従って腰を折り、今日はまた小早川に降って膝を折り、大切な人質を振り捨てて他人に後指をさされて生きながえ、千歳に恥をさらさんより、潔く討ち死にして美しき武名を後世に留むべきではないか」と、熱意を満身にこめて言い放ったので、居並ぶ諸將は勇氣百倍し、然りと軍議を決定し、金子元宅は宇摩・新居両郡の総指揮として将士を氷見ひみの高尾城に集結させて戦鬪の準備を進めた。

金子元宅が決戦いんどに挑むという情報を得た小早川隆景は天正十三年七月十四日、大軍を率いて高尾城を包囲して繰り返し攻撃を加えた。高尾城は暫くの間は持ち堪こたえたが、衆寡敵

劍山城（小松町）を攻撃した。黒川氏は善戦したが支えること能わず、属城の獅子鼻城（小松町）とともに城を捨てて湯築城へ逃れたとあるが、『小松邑志』所収の「宇野文書」によれば、獅子鼻城の宇野一族は情勢を察知して逸早く小早川軍に参じて、その先鋒となつて協力したとされている。

隆景は桑村郡の鷺森城（東予市）の桑原氏、象森城（同市）の櫛部氏を滅ぼし、続いて府中（現今治市）へと軍を進め、国分山城主村上武吉・石井山城主重見孫七郎・老曾山城主村上監物・重茂山城主園部十郎・鷹取山城主正岡紀伊守らを降伏させた。鷹森城主越智駿河守は戦わずして降伏した。野間郡では人遠城の大野佐渡守が来島勢の攻撃を受けて自殺し、重門山城主高田左衛門進は降伏した。次いで高仙山城こうぜんの池原通成は城外に討つて出て戦ったけれども全滅の憂き目にあつたのである。

風早郡では来島勢が立岩（北条市）の重見孫四郎が立て籠っている日高城を陥落させ、二神・宇佐美・目見田・尾越といった難波衆の拠る高穴山城（北条市）も桂左衛門大夫の攻撃を受けて落城した。続いて鹿島城・善心寺・横山城の諸城も陥落した。新居・宇摩・



湯 月 城 址 伊予の名族河野氏の本拠であった

周敷・桑村・越智・野間・風早の諸郡を掃討した小早川軍は道後平野に進撃し、八月下旬湯築城を包囲した。この湯築城は周囲八・五町で外堀・内堀と二重の濠をめぐらせ天然の要害を利用した平山の堅城である。

× × ×

これより先、湯築城主河野通直は、小早川隆景の大軍を迎え討つため和氣・温泉・伊予・久米・浮穴五郡の将兵を湯築城に結集させた。平岡遠江守と大内伊賀守信泰は二ノ丸を、戒能備前守通森と松末美濃守通為と土居兵庫頭建直は三ノ丸を植生加賀守盛周と三好長門守秀慶は良の郭を守らせた。河野軍と小早川軍

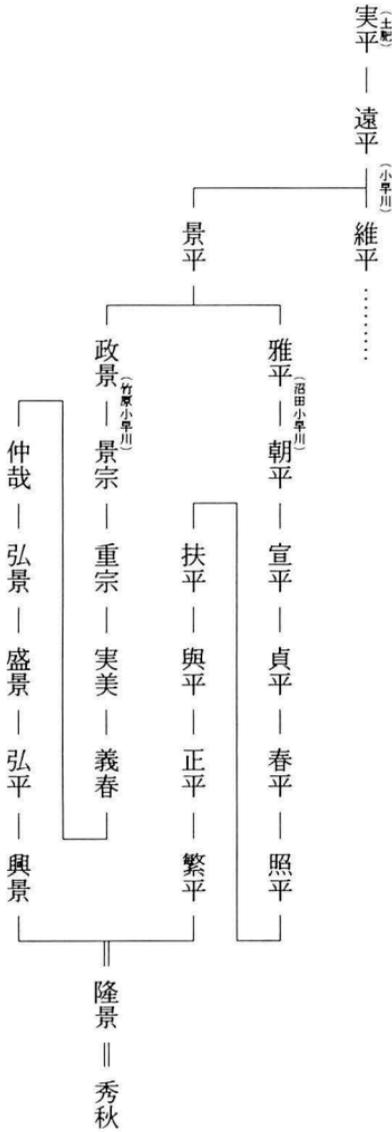
の攻防戦は繰り返されたが、九月六日隆景は通直に書を送って「抵抗をやめて帰順し、河野氏の家名を守るように、この事についてはできる限りの努力をおしまない」旨を述べて降伏の勧告を行ったのである。

河野通直は重臣たちを集めて評定をした。「武士らしく最後まで戦うべきである」と強硬に主張する者があって容易に決しなかったが、大熊城主戒能備前守通森が進み出て、「今、勧告を拒んで戦いを続けても敗戦はもはや時間の問題である。四国の諸城は既に秀吉のもとに降伏しており、強いて抵抗すれば一千余年の長きに渡って続いてきた河野氏は滅亡してしまふ。主家を存続させるためには涙を呑んで隆景の勧告を受け入れるのが賢明な策であるまいか」と強く主張したのである。

この意見には一族の者をはじめ重臣たちの間においても異論がなかったので、遂に通直は降伏することを決意したのである。直ちに城門を開き、平岡治部少輔を人質として差し出し帰順を表明した。湯築城の降伏が知れ渡ると、喜多・宇和の大野直之・曾根宣高。西園寺公之らも相次いで小早川隆景の陣営に赴いて帰順することを誓った。

河野氏降伏後の伊予は、小早川隆景は三十五万石を与えられ大名に封ぜられた。四国平定軍の先鋒として戦功のあった来島通総くるしまみちふさは野間・風早二郡の領主に任じられ一万四千石を与えられ鹿島城主となった。得居通之は風早郡のうち三千石を与えられて恵良山城主となったのである。

小早川氏系図



一三、湯築落城後の河野家一統

天正十三年（一五八五）九月、湯築城主河野通直が秀吉の四国征伐軍に降伏すると、小早川隆景は伊予三十五万石を与えられ湯築城に入った。河野通直は小早川の好意を受けて湯築城の一隅で蟄居し、秀吉からの河野家再興の許しが出るのを待っていた。

ところが、小早川隆景は筑前国と肥前・筑後の各二郡を与えられて転封となったのである。秀吉は小早川隆景と河野通直の関係を断ち切っておくため思い切った処置に出たのである。秀吉は四国征伐を進めるとき、伊予攻めに小早川の出兵を命じたが、執拗に食い下がって、占領後における「伊予一国一職」の朱印状を書かされた小早川の妻腕すじうでに「してやられた」と悔いを残していたことを決して忘れてはいなかったのである。

「大国に栄転」という形のもとに、毛利氏を遠ざける処置をとり、同時に河野氏の再起



福 島 正 則

を断つという「一石二鳥」の策を断行した秀吉はさすがである。将来の「天下統一」のためにも、ここで秀吉は底力を示しておく必要が肝心と思ったのであろう。

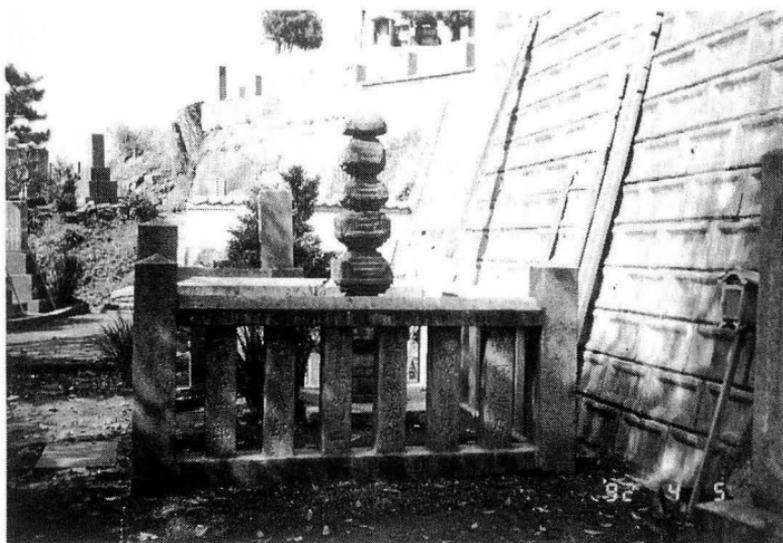
小早川が転封となったあとへ、福島正則が湯築城に入ったので、河野通直は城を出なければならなくなった。毛利氏の計らいで備後国竹原に移ることになった通直は

『予陽河野家譜』によれば、七月九日湯築城を出発して三津港より上船した。このとき隨行した者は、南彦知四郎通具・松末美濃守通為・土居入道了庵・同五郎安長一族・井門宗左衛門義安・枝松太郎光栄・由並耆岐守通資・栗上因幡守通宗・同但馬入道・平岡遠江守通倚・津々亀谷齐宮通高・別府宮内少輔通興・忽那新右衛門通恭・大内伊賀守信泰・久枝肥前守宣盛・正岡右近大夫常政・大野山城守直昌・垣生賀守盛国・和田山城守通勝・宇野

隼人正為綱・同民部亟識綱・三好長門守秀吉・同藏人助秀勝・中石見守通言・大西弾正通秀・佐伯河内守惟之以下譜代の重臣一族郎党五十余人であった。

河野通直は有馬温泉で湯治をしたあと、紀州の高野山に登って上蔵院で持戒、祖先の菩提を弔い、秀吉のために城を追われたことを奉告したあと竹原に赴いて静かに暮らしていたが、天正十五年七月十四日、病のため二十四歳の若さで没した。嗣子がなかったので、伊予の名族河野氏は遂に断絶となったのである。

私は秋晴れの一日、胸つまる想いを抱きながら竹原市の不老山長生寺を訪ねた。住職の豊田修賢氏に逢って教えを乞うたのである。小早川隆景は河野通直を憐んで菩提を弔うために長生寺を建立し、寺領二百石を寄進して法常寺の僧月禅を迎えて開山した経緯について話を聞くことができた。残念にも、その後長生寺は火災にかかったので、当初の記録などは焼失したという。河野通直と殉死した村上掃部頭元吉の位牌が奥深く安置されていた。河野通直の墓地は長生寺境内の左側の奥、小高い山の上にある。ゆかりの人々によって整理されていたが一抹の淋しさがあたりに漂っているように思えてならなかった。その後、



墓の直通野河

紀州の高野山に詣でたとき、奥の院に通じる石畳の参道の向かって右側に「伊予国太守河野家墓所」という碑が立っているのが目についた。石の鳥居があって、その奥に河野氏の五輪塔がしっかりと坐っていたのである。

× × ×

河野通直に随って備後国に移り住んでいた重臣たちは通直公の死後、一周忌、三周忌、七周忌、十三周忌を執り行ってきた。この集会は単なる法要を行うだけではなく、河野家の再興について協議を行う場でもあった。既に通直の生前から河野家の再興は許

されるものと信じていた毛利氏一族は深い関心をもって、その一族である宍戸元秀の子、但馬守景好を迎える斡旋の勞をとって、名を通軌と改めさせていた。秀吉から河野家再興の沙汰があり次第いつでも直ちに受け入れることができる態勢づくりをしていたのである。

ところが、秀吉は河野氏の再興を許さなかったのである。河野氏一族や遺臣たちの落胆は大きかったに違いない。その悲しみは憤りとなり恨みに変わっていったのである。秀吉が九州に西下する途中、軍船を竹原の湾内に停泊させ上陸して雲龍閣に一泊するという情報を得た通軌はじめ河野氏の遺臣大野山越守通昌・得能備後守通俊らは秀吉襲撃の計画を立てた。だが、それは事前に露見して全員が討ち死にしたのである。このことを知った竹原湾上にて待機していた者たちは「もうこれまで」と自決し或いは四散したと伝えられている。

この秀吉暗殺計画の共同謀議に参加した者は、平岡遠江守通倚、河野耆岐守通資、得能備後守通慶、和田左衛門尉通末、戒能藤兵衛通次、大西弾正通秀、大野山城守直昌、土居兵庫頭通達、井門宗左衛門義安、大内伊賀守信恭、垣生加賀守盛周、戒能備前守通盛、日

吉左馬、白石若狭、野田將監、白石三郎大夫、別府修理大夫、日吉六郎左衛門、和田山城守、渡部丹後守、堀池右馬、志津川修理などの名が見えている。

竹原の長生寺で河野通直の十三周忌が行われたのは慶長四年（一五九九）七月十四日であった。その前年に秀吉は六十三歳でこの世を去っている。五大老の一人徳川家康は、加藤清正、福島正則、浅井長政らを味方に引き入れて、反徳川の謀將石田三成以下毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝らとの間に溝を深めさせていった。豊臣方の力が弱まった頃、政争はいよいよ表面化し、遂に武力を以って決着をつけようとする形勢は濃厚となった。

慶長五年（一六〇〇）七月、遂に石田三成は家康の罪状を挙げ世に訴えて西国の諸大名と共に兵を挙げた。この時、松前城主加藤嘉明は家康の命を受けて東軍に属し、その留守を弟忠明に預けて出陣した。かねてより、家康は三成らの行動を予期しており諸將を大坂に向けて先発させていた。嘉明は黒田長政軍と共に三成側の岐阜稲葉城を攻略した。やがて家康も東海道を西上し東軍と西軍は関ヶ原で大合戦が展開されたのである。これが世にいう「天下分け目の戦い」である。

佃十成は中島庄左・足立重信・堀部主膳らと対応を協議し、このまま正面から当たったのでは勝目がないことは明らかであるから佃十成の奇策を用いることにした。

一方、十三年振りに伊予で一夜をあかした河野氏の遺臣たちと毛利軍は三津浜に上陸して刈屋畑（現古三津）に陣を敷いた。佃十成は城内の守備を固める一方で、百姓や行商人の中からスパイ活動に適する者を選んで金子きんずを与え、刈屋畑へもぐり込ませた。

加藤の殿様になってからは苛酷な政治が続いて民百姓は皆苦しんでいる。聞くところによると強い軍勢がやって来て退治してくれるそうじゃ。嬉しいことじゃのう。今、留守番をしとる者は弱虫ばかりで戦う気力なんか無いということじゃ。

と、不満や悪口を言いふらさせた。これを聞いた毛利軍たちは心をゆるしていた。

ところが、十五日の真夜中にあちらこちらで「火事だッ」「火事だッ」という叫び声があがった。火の勢いは見る見るうちに大きく広がって煙が渦巻き熱風が充満して、まるで火炎地獄絵のような有様となった。その時、佃十成軍が一斉に斬り込んでいったから毛利軍は不意を突かれて総崩れとなった。この時の戦死者は村上備中守・能島内匠頭・曾根兵

庫介諸將をはじめ数百人に及んだという。今でも古三津方面には三將の祠ほくらと無名戦死者の墓石が残存している。

領国奪回を図った河野家遺臣たちの損害は大きかったが、安芸国より第二陣が到着したので三千五百余の軍勢にふくれあがった。久米村の如来院などに立て籠ったので、河野氏の恩を感じていた者たちが多数参加したのである。

宍戸・村上軍が佃軍に鉄砲を打ち込んだため佃軍の前進は困難を極めた。黒田九郎兵衛が体当たり戦法で突入したが、弾が胸板を貫通して戦死した。だが、この時をきっかけにして大勢の者がどっと躍り込むように突入したので、宍戸・村上軍は山越村の八幡山へ退いた。特攻精神の権化のような黒田九郎兵衛の霊は、現在久米の日尾八幡神社にある生目いきめ神社に合祀されている。

河野家の遺臣で浪人中の平岡通達や戒能通森が馳せ参じて山越村の八幡山を占領したが、ここでも佃軍は奇策を用いて本陣近く攻め込んだので、毛利軍は港山に退却し軍船に飛び乗るようにして遠く沖に逃れたのである。

一方、関ヶ原の戦いは徳川家康の東軍が大勝し、河野家の再興の望みは断ち切られたので、生き残っていた遺臣たちは新天地を求めて四散して行ったのである。

× × × × × × × ×

正木（松前）城主加藤嘉明は加賀国の藤原北家景勝の次男景長から分かれた鎮守府将軍利仁を遠祖としている。四代にわたり三河国で居住していたが、永禄六年（一五六三）嘉明の父教明は一向一揆に加わって徳川家康と戦ったのである。生まれたばかりの嘉明は、家人と共に三河国を脱出し、十二歳のころには近江長浜で馬喰ばくろをしていた。当時、既に秀吉は長浜に城を築いて領主になっていた。この頃から嘉明は秀吉に仕えたいと願っていたという。十五歳のとき岐阜に馬を売りに行き、加藤景泰に見出され、推挙されて秀吉に仕えることになったのである。

従って、嘉明は少年時代から秀吉に仕えた子飼いの家臣である。同じ賤ヶ岳の七本槍に数えられていても、槽谷武則や平野長泰らは成年に達してからの仕官で、直参衆として區別せられている。

嘉明は天正十年（一五八一）の賤ヶ岳の合戦で柴田方の将浅井吉兵衛尉則政を討ち、三千石を賞賜された。天正十三年（一五八五）秀吉が関白になったとき、従五位左馬介に叙任され、雑賀・根来・佐々らの討伐に参戦した功により、翌十四年には淡路国の志智一万五千石を与えられたのである。

志智城は大日川によって瀬戸内と結ばれ、伝統的に淡路海賊の根拠地であった。嘉明は天正十八年（一五八九）の小田原の役にも志智の水軍を率いて参戦して軍功を挙げた。次いで文禄元年（一五九二）秀吉の朝鮮出兵がはじまると、嘉明は水軍の将として出陣した。志智領内の水夫たちはみな参戦したが、強力な朝鮮の水軍のために苦戦し多数の戦死者を出した。今も西淡町江善寺には「高麗陣打死衆之碑」（文禄元年在銘）が遺されているのである。

加藤嘉明は文禄の役の戦功によって、文禄四年に伊予六万石の封を受け正木（松前）城主となった。嘉明は福島・細川らと西軍側の岐阜城を陥れ、天下分け目の関ヶ原の合戦では石田三成の本隊を突き崩す戦功をあげた。その戦功によって、二十万石を与えられ伊予

松山城主となったが、寛永四年（一六二七）には会津四十万石の大大名に転封し、同八年九月に病没した。嗣子明成のお家騒動が起り改易となったが、嘉明の勲功によって子孫は近江水口に二万石を与えられて家を伝えることができたのである。

一四、三原八幡藪事件の謎

広島県の三原市八幡町を訪ねると、野串の山林中に、青く苔むした宝篋印塔を中心にして数十個の古びた五輪塔が散在しているのが目にとまった。地元の古老に聞いてみると、「伊予河野氏一党の墓」と言い伝えているというのである。

昭和五十三年のことである。三原市に住む西丸四郎翁が、小学校教員の宮崎信昭氏を訪ねて、「野串の山林に散在している多数の五輪塔は、伊予国の河野氏遺臣たちのものである。最近では荒れ果てて消滅の危機に瀕しているので、何とかして顕彰してもらえまいか」

と熱心に頼み込んだというのである。宮崎氏は翁の熱意にほだされて、「公務多忙のため時間はかかるであろうが、出来るだけ努力してみよう」と引き受けることにしたのである。

爾来、宮崎氏は史料を漁りあき伝承を探索し、その傍ら有志たちと力を合わせて散在している五輪塔を集め、埋没しているものは掘り起こして整理したのである。収集した史料や研究した成果を纏めて、『八幡の藪事件と河野氏の墓』という冊子を刊行している。

その内容の概要は「秀吉の四国征伐の小早川隆景軍に降伏した河野通直は、秀吉に再興が許されるものと信じ込んでいたが、許されないまま竹原の地で病没した。通直は河野氏の一門である池原通吉の子であって、既に三歳の時、先代通宣の養子になっていたのである。通宣には妾服の実子通昭がいたが、系譜には出生時も死没時も記入されていないが、通直が病没した時には七十七歳ぐらいであったと伝えられているのである。

通昭の母は荒木村重の一門から出ており、淀川あたりに領地をもっていた荒木氏の女で通宣の京都妻であったようで、通昭は京都周辺で生育し、学問や茶道をよくし、武芸兵法にも通じていたといわれている。

通宣の継嗣問題が起きたとき、金子備後守元宅らは通昭を強く推薦したのであるが、通昭は国侍たちの派閥や感情のことを考えて固辞したのである。しかし、通昭は人物が立派であったので、河野家の古文書一切を托して伊予国から離れさせていたので、『河野家文書』は難を避けることができたのである。

通昭が京都市下鳥羽芥川に落ちついていたということは、『鳥羽宮記録』の中に「通昭父子が来たのは天正十三年八月」という記録があるので明らかである。嫡子の通許は父の計画が失敗したときのことを考えて、母の「筑山姓」を名乗らせていたのであって家系は今日まで続いているのである。

x x x x x x x

豊臣秀吉が朝鮮征伐の基地である肥前国名護屋に西下する日程が決った。天正二十年（一五九二）三月六日京都出発、四月七日備中国矢掛泊、四月八日備後国神辺泊、四月九日備後国三原泊、四月十日安芸国西条泊、四月十一日安芸国広島泊、四月二十五日名護屋着、ということである。



備後国総鎮護 御調八幡宮

備護国神辺泊の日は御調八幡宮みつぎに立ち寄って戦勝祈願を行ってから三原城に入ることになっている。この情報を得た河野氏の遺臣たちは、秀吉襲撃の最適地を調査し、輸送や襲撃の手配について練りに練って、数日前に沼田庄本郷に集結、八幡宮の裏山に潜入して待機

する計画であった。だが、計画は事前に露見し、全員捕えられて処刑せられたのである。それ以後、秀吉は山狭を通ることを極度に恐れ、海岸沿いの道路を通ることに変更を命じたので、道路奉行はこの急激に変更せられたことに困惑し、大へんな苦勞をしたという記録が残っている。

秀吉が「天下人」を目指して全国統一の軍を推し進める過程における河野氏に対する処

置は苛酷に過ぎた。特別に抵抗したわけでもなかったのに、長宗我部氏に対しては土佐一國を安堵しているのに、河野氏の領地はすべて没収したのである。領主河野通直は住むべき所もなくなり、家臣たちは禄を失って生活権が脅かされる状態に陥ったので、不安は恨みに変わっていったのは当然であろう。

この事件に関しては、既に大正十年（一九二一）に、元三原市立図書館長の沢井常四郎氏が、その著書『御調八幡宮 八幡荘』の中で、

文禄元年（一五九三）秀吉が三原城に入り八幡神社に戦勝祈願をするため参拝する途上において、河野通直の養子甲立五龍山城主宍戸備前守通軌が、秀吉のために河野家の所領を没収せられたことを恨み、一族得能備後、和田左衛門、栗上因幡、土居兵庫父子、松末美濃守以下剛士三百人、八幡藪に潜伏し秀吉を狙撃せんとしたが、不幸にして誅に伏し、河野家は遂に滅亡せりと伝う。

と述べている。つまり、この五輪塔墓石群の中心にある宝篋印塔は秀吉襲撃隊の首領河野通軌のものであるというのである。

ところが、中島忠由氏は、その著書『因島地方一万年史』の中で、

戦いに敗れた河野の総領家の通直は、隆景に助けられて竹原の山田の寓居におもむいたが、前途をはかなんで、ついに自害してはてた。時に僅か三十四という若さであった。その母は宍戸隆家の女で毛利元就の養女として河野家に嫁いだ人であったから、彼女はその里方から養子をもらい河野の後継者として太郎通軌と名のらせた。また、隆景も通直をふびんに思い竹原に長生寺を創建して、その後世をとむらった。通軌の子息通昭は、四国征伐の爾後処置で、河野家の所領をことごとく没収されたのを深く恨み、文禄元年秀吉が九州へ下向のをり、備後三原に滞在して八幡神社に参拝し、戦勝祈願をすると知って、一族の得能備後・和田左衛門・栗上因幡・土居兵庫父子・松末美濃らとはかり、剛勇の士三百人ほどで、神社のかけにひそんで太閤を狙撃しようとはかった。しかし、残念にも事前にもれて、これに組した人達はあえなく殺されてしまった。

と、前書では通軌となっているが後書では通昭となっている。いずれが正しいかは現在

のところ正術すゑがない。

これだけの大事件であるのに正史には取り上げていないのに疑問を感じて、広島県三原市役所の「市誌編纂室」に問い合わせの電話をしたところ、「八幡藪事件というのはありません」という女子職員の返事が返ってきた。「今、新聞に出ておりますように宮崎氏が研究している野串の五輪塔群の墓石はどういうものでしょうか」と尋ねたが、「八幡藪事件というのはありません」と慥けんもほろろの返事がはね返ってきて驚かされた。

「八幡藪事件即ち秀吉襲撃未遂事件」というのは虚構であろうか。だとすれば、あの宝篋印塔を中心にした五輪塔群は誰を埋葬し祀ったものであろうか。疑問は残ったままである。とかく歴史は時の権力者によって都合のよいように書き換えられることが少くない。秀吉の名誉を傷つけないように「八幡藪事件」は消されたのかも知れないのである。伝承になつているものの中に歴史の真実が語られていることがよくあることを忘れてはならないのである。

× × × × × × × ×



三原市野串 河野氏遺臣墓石群

平成四年は、伊予河野氏の遺臣たちが、三原御調八幡神社に戦勝祈願に参拝しようとする秀吉を襲撃して、河野氏を滅亡させた恨みを晴らそうとした未遂事件が暴露して、悉く処刑されてから四百年忌にあたるので、地元の有志東静児・東博道と宮崎信昭氏らが発起人となって、現地で「四百年忌法要」が厳かに執り行われた。

私も河野氏ゆかりの者の一人として参列することになった。春の初めから長雨が続いていたので、当日の天候が非常に気がかりであったが、当日は不思議にも、朝からカラリと晴れ渡って青空がいっぱいに広がっ

た上天気となった。山々は昨日までの雨ではこりが洗い流されて緑が美しく輝いて見えた。県外各地より、ゆかりの人々が集まってきて法要を厳かに執り行なったのである。河野氏遺臣たちの霊は、四百年振りにして漸く慰められたのである。

一五、河野家遺臣たちの動静

伊予の名族として知られた河野氏が滅亡したあと、遺臣たちはどのようなようになったのだろうか。その総てすべを知ることには不可能であるが、歴史を振り返ってみるとき、いつの時代でも、いかなる戦乱のあとでも、生き残った人々は、戦争体験を生かして前向きに雄々しく生き抜いているのである。その遺臣たちの生き様の一例を紹介しておこう。

旧浮穴郡濃田村の三嶋明神宮（現徳威三嶋宮）に伝わっている『中野村定法』や中野村九代目庄屋宮内宇平次敷躬よしみが書き留めていた『中野村開発日記』を見ると、河野家の遺臣

たちが苦難と闘いながら強く生き抜いた様子をうかがい知ることができるのである。

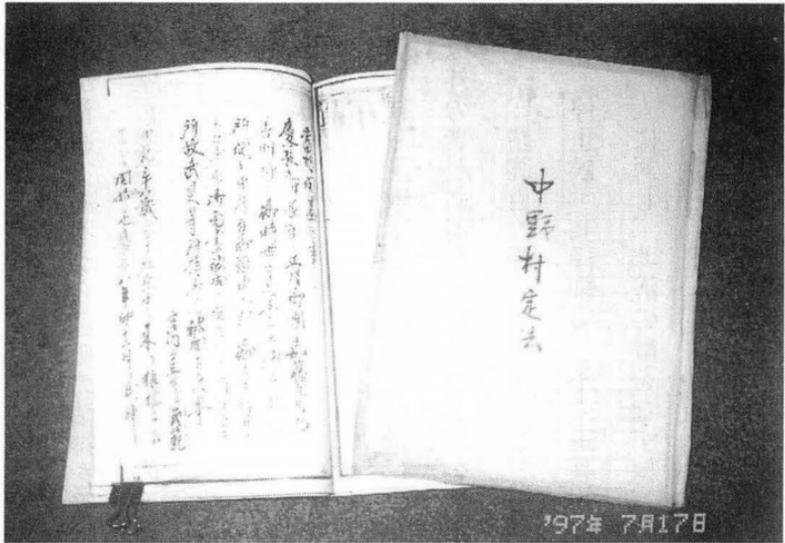
慶長八年（一六〇三）十月、松山城に移った加藤嘉明は、その翌年に奉行の足立重信に命じて、伊予川が氾濫して荏原・高井・野田村にまたがる広大な地域が荒野原になるところに目をつけ、開拓布令を出させたのである。河野氏が滅亡して禄を失った遺臣たちが生活に苦労していることを見て、今様風にいえば一種の「失業対策事業」に匹敵するものであるが、遺臣たちの中には、心機一転、新しい生活を確立しようと、この布令に応じたのである。

宮内与三兵衛義範は同志七人と共同で中野原の開拓に取り組んだのであるが、伊予史談会蔵書の中にある河原与三衛門に宛てた奉行足立重信の『御免書』に、開拓従事者に与えている条件や心得が記されている。

一、 沓反に付、当年来年は沓斗代。但し三年目には沓斗五升代たるべき事。

一、 ひらきし所へ相越あり付候は、御年貢の外永代諸役有間敷事。

一、 人遠き所に候間、ぬす人の用心。自然道具など持共くるしかるまじく候。



中野村定法

とあって、開拓に従事する者に温かい配慮がなされているのである。

宮内与三兵衛義範は

氏神三嶋明神宮に七日間の参籠をして神託を祈った。満願の日の払暁三嶋大明神が夢枕に現れて「この原中に家を構え、歳月を経れば必ず繁栄する。いけにえの牛を連れて来て、その臥す所を住み家とすべし」とのお告げがあった。与三兵衛は随喜して氏神に感謝し、代々家に伝わっていた二尺五寸の左文字の太刀一腰と黒系緘の鎧一領、鍬形の甲（兜）一刎を奉納した。

と『中野定法』に記されている。やや劇的描写であるが、この種の記録は美化されているのが普通であるから、その精神を受け取ることにはしたい。『中野村開発日記』も九代目の庄屋宮内宇平次敷躬が書いたものであるから、慶長九年当時のことがどれだけ正確に記述されているかは疑問であるが、当時の遺臣たちが真剣に生きようとする尊い姿は推測できるのである。

× × × × × × × × × ×

天下統一を成した豊臣秀吉は既に天正十六年（一五一八）七月、刀狩令を布告して武士以外の者が武器を所持することを禁止し提出させたのである。

一、諸国百姓等刀、わきざし、弓、やり、てっぽう、其外武具のたぐい所持候事堅令停止候。其仔細者、不入道具相たくはへ、年貢所当を難渋せしめ一揆を企、自然給人に對し、非儀の働をなす族、勿論御成敗あるべし。然者其所の田畠令不作知行ついえに成候間、其国主給人代官等として右武具悉取あつめ可致進上事。

一、右取おかるべき刀、わきざし、ついえにせらるべき儀にあらず、今度大仏御建立

候釘かすがいに被仰付べし。然今世は不及申来世迄も百姓相たすかる儀に候事。

一、百姓は農具さへ持ち、耕作を専に候へば、子々孫々まで長久に候。百姓御あわれみを以て、如此被仰出候。是国土安全万民快樂の基也。異国にては唐堯の其かみ天下を令鎮撫実剣利刀を農具に用候も本朝にてはたのしあるべからず、此旨を守り善其趣を在知、百姓は農業に精を入べき事。

右道具急度進上、不可油断候也。

天正十六年七月 御朱印

という布令で、「本朝にてはためしあるべからず」と、それまでには例がない禁令であることを宣言しているのである。

しかし、既に天正四年（一五七六）に柴田勝家が、仁治三年（一二四二）には北条泰時が出した禁令があるので、これにならったものであろうが、全国的に布令したのは秀吉が最初である。

織田信長は宗門一揆で随分悩まされたが、その裏には武器が自由に用いられたからであ

る。秀吉は「刀狩り」政策によって武士と町人・百姓を厳然と区別し、戦争の禍害を縮小することを實現し、百姓や町人が戦争にかり出されることを無くしたのである。続いて天正十九年（一五九一）には、

奉公人、侍、中間、ちゅうげん小者、こものあらしこに至るまで去る七月奥州へ御出勢より以後、新儀に町人百姓に成候者於有之は、其町中地下人として相改、一切をくべからず、若かく置に付ては其一町一在所、可被加御成敗事。

と布令し、武士から町人百姓になることを新たに禁じたので、武士は主人を失った後も武士の姿で残らねばならなくなったのである。

× × × × × × × ×

宮内与三兵衛義範らは中野原の開拓に精を出して、その年の末には田地五反歩と畠地二町九反歩を造成したのである。慶長十八年（一六一三）は開拓十周年である。その中心的存在として指導に当たってきた宮内義範は中野村の初代の庄屋に任ぜられているので、この年に中野村が誕生したものと思われるのである。

こうして開拓した中野村は、現存している石高帳こくだかで最も古い、慶安元年（一六四八）の『伊予国知行高郷村数帳』によると、

浮穴郡中野村

高貳百拾石三斗壹升貳合

内 田方百四石四斗

畠方百九石九斗貳升貳合

とある。慶長九年に開拓をはじめてより四十四年後である。

ちなみに隣接の村高を見ると、

浮穴郡東方村

高千百拾八石六斗八合

内 田方八百七拾四石貳升壹合

畠方貳百四拾四石五斗八升七合

同 津吉村

高七百八拾八石四斗九升

内 田方七百三拾壹石九斗壹升

畠方五拾六石五斗八升

同 野田村

高千貳百三拾九石七斗九升三合

内 田方千貳拾壹石四斗貳升六合

畠方百拾八石三斗六升七合

となっている。

また、旧久米郡志津川村の岩伽羅城の支城吉山城主和田河内守吉盛の子吉次よしつぐは、湯築城の戦いするとき石手寺に預けられていたので難を逃れることができた。後に還俗して田中姓を名乗り、浮穴郡麻生村に移り住んでいたが庄屋となり子孫は現在に及んでいる。

戦国時代に生まれ合わせた人たちは、好むと好まざるに拘らず戦乱に巻き込まれて、生活を脅かされ生命の危険にさらされ、命を奪われることも日常茶飯事のことであつたらう。

当時の人々はどのように考えていたのであろうか。宿命と諦めていたのであろうか。群雄割拠する中で、食うか食われるか、あの猛獣の世界のような明け暮れであったのであろうか。想像することは容易でないが、戦国時代の人々が遺している文化に接するとき、「なんと偉大である事よ」と心を打たれ、人間とは弱い者であると同時に素晴らしく強い者であることを知り驚嘆させられるのである。

河野分限録

『河野分限録』というのは、下浮穴郡野田村（現温泉郡重信町大字南野田）に在任の得能通義氏が所蔵していたもので、『河野人数巻』ともいわれている。戦国時代の末頃のものと思われるが、筆者は不明である。内容は河野家配下の部将たちの氏名や本拠とした居城名や家臣名などが列記されている。河野一門の三十二人をはじめ、寄合衆、侍大将、家老職、船大将、旗本武奉行、足軽大将、旗奉行、鎗奉行、海目付、小姓、納戸衆、同朋頭、勘所頭、台所頭、祐筆頭、横目衆、御前様付衆、春祥院様付衆の氏名が書いてある。その一部をここに転載しておく。

予州風早郡高繩山城主 温泉郡湯月在城

河野伊予守越智朝臣通直卿御内

始四郎殿卜云、中頃号兵部大輔（後号伊予守）

御一門三十二将之事

枝松太郎光榮

由並老岐守通賢（實）

栗上左衛門尉通妙

栗上因幡守通宗

栗上但馬入道通閑

別府宮内少輔通興

大祝日向守安勝

垣生加賀守盛周

大野山城守直昌

村上掃部頭武慶

村上備前守吉光

村上出雲守通康

忽那式部少輔通著

得居半右衛門尉通久

大内伊賀守信泰

平岡遠江守通倚

南美作守通師

土居兵庫頭通建

松末美濃守通為

久枝肥前守宣盛

桑原三郎兵衛

戒能備前守通森

今岡民部大輔

中川常陸守通任

重見弥七郎通俊

正岡右近大夫経政

黒川美濃守通博

和田山城守通勝

河野左門通冬

土居左馬介通利

櫛部肥後守

得能遠江守通能

以上三十二人

御代々御連著御末孫

此三十二家ヨリ

御八家御寄合衆

御家老職

十八組御侍大将

御武者奉行

右御役被仰蒙御家筋之衆中也。

諸士御役付之事

御寄合衆八将

枝松太郎光栄

手勢五騎

但先祖ヨリ御陣ノ節ハ半役相勤来ル。

由並耆岐守通資

手勢十騎

此内正田若狭守、沢田氏、大森氏、小森氏、此余不知

栗上左衛門尉通妙

手勢五騎

別府宮内少輔通興

手勢六騎

大祝日向守安勝

手勢廿騎

越智郡三島。

垣生加賀守盛周

温泉郡高岡村高山城主

手勢十騎。

栗上因幡守通宗

松前城御陣代、手勢四騎、寄騎十騎、足輕十五人。

栗上但馬入道通閑

右同断、手勢三騎、寄騎十騎、足輕十五人。

以上八人、右之内御出人之節ハ御先備御留守居、他国御加勢之節、御陣代被仰蒙

御在城之節ハ御屋形日勤政務被仰也。但、光栄・通資・通妙・通興四人之衆ハ御

組付無之故、御出陣ノ節ハ諸郡一騎合之衆預之。

土佐の名族

安芸氏

安芸土居城主、中世以降安芸郡の西半分を支配。永祿十二年（一五六五）安芸備後守国虎は長宗我部元親に滅ぼされ、一子千寿丸は逃れたが天正十年（一五八二）中富川合戦で敗死す。

吉良氏

配流の武将源希義（頼朝の弟）の裔であるとの伝承あり。天文の頃吉良宣経は土佐七人衆の一人に数えられた豪族であったが、その子宣直は永祿年中に本山氏に滅ぼされた。その本山氏も元親に滅ぼされ元親の弟親貞が吉良城主となった。

香宗我部氏

甲斐源氏の嫡流武田左京亮秋通が建久の頃に土佐に来て地頭となり「香宗我部」を称したという。後、長宗我部元親の弟親泰を養子とした。文人画家中山高陽山人はこの子孫である。

谷 氏

一宮土佐の神官谷忠兵衛は長宗我部氏に仕えた帷幄の謀臣である。岡豊城八幡の神官谷左近からは南学者谷秦山、垣守、真潮を、幕末には谷千城を出した。両系とも大和国三輪谷の大神氏おのみわの出といわれて、土佐の思想学問を司ったのである。

久 武 氏

長宗我部股肱の老臣三家老の一人。久武内蔵介親信は軍代として伊予攻略に出陣の際に戦死した。弟内蔵介親直が跡を継ぎ牛耳っていたが、後親直は土佐を離れ肥後の細川氏に仕えた。

本山氏

嶺北の名家で土佐戦国時代の最大の豪族である。茂宗は永正の頃、長岡、土佐、吾川三郡を兼併した。のち朝倉城に移った。その子茂辰しげとよは長宗我部国親の娘（元親の姉）を娶ったが、元親に滅ぼされ阿波に逃れた。子の将監は信親に従って豊後戸次川の戦いで戦死した。子孫に明治維新の頃、本山只一郎は山内容堂に近侍し、のち加茂神社その他の神主になっている。

波川氏

高岡郡波川城主波川玄蕃清宗は元親の妹を室とし武名があった。のちに元親と内訌を生じ、阿波に逃れ海部で自殺した。室は剃髪して養甫尼と号し、成山村に閑居、旅人より紙の製法を学び、七色紙を創製した。

奥宮氏

香美郡山田郷に発祥、永禄十一年（一五六八）一宮神社造宮帳に名が出ている。子孫、豊後国戸次川合戦や八尾合戦で戦死。幕末の陽明学者奥

宮慥齋はその子孫である。

桑名氏

長宗我部氏に仕えた三家老の一人。丹後守は戦功あって安芸郡奈半利城主となる。慶長五年（一六〇〇）浦戸一揆を鎮圧し一領具足を打ちとり、土佐を去って伊勢藤堂家に仕えた。元和元年大坂夏の陣で敵対した長宗我部盛親の馬前で戦死した。

島村氏

近江国細川氏上館管領家の武将島村弾正左衛門高智は、武勇を以て聞こえ没後「島村蟹」と称された。その裔が土佐に下り長宗我部元親に仕え、浦戸種崎に住んだ。子孫一門蚊居田、下島、安芸、甲浦方面に繁栄した。幕末、武市半平太の妻富子は島村家の出である。

中内氏

遠祖近江皇別大族中原氏。長宗我部の老臣で長岡郡岡豊村江村郷より起こる。中内惣右衛門は慶長五年関ヶ原の合戦で敗れた際、主君盛親を擁して帰国。大坂陣では盛親を扶け、元和元年（一六一五）七月落城して近江八幡近辺にて

主従捕縛される。

野村氏

清和甲斐源氏より出て、香宗我部氏、ついで長宗我部氏に仕え主家滅亡と共に帰農して、安芸郡奈半利村に住す。山内氏が浦戸城接收の際、これに抗した野村孫右衛門ら長宗我部遺臣二百七十三人は計られて討たれ、今日、石丸塚に葬られている。

津野氏

藤原鎌足の裔と称し、高岡郡津野庄におこり半山城領主。津野刑部少輔元実は永正十四年（一五一七）一条氏の連合軍と戸波とわ恵良沼えらぬまで戦い、従士五十三人、雑兵三百八十余人と共に主従みな戦死した。あとは長宗我部元親の三男親忠を城主に据えた。

千野氏

香美郡田村にて大永の頃（一五二〇年代）一条氏の全盛時に、千屋城主として勢力があった。子孫に幕末志士千屋孝健・金策兄弟、奈半利川廿三士の千屋孝樹、海援隊士千屋寅之助を出す。

伊予の名族

金子氏

鎌倉時代に武蔵国から新居郡に地頭職として入部した村山党の一族である。戦国時代、石川氏に被官したが、家臣団中の実力者となった。天正期に金子元宅もといえは進攻してきた小早川隆景と戦って戦死した。子孫は土佐に逃れ、近世に山内氏の家臣となった。

石川氏

室町・戦国時代には宇摩・新居両郡の領主となった家柄である。南北朝の時代に両郡の分郡守護となった細川氏の代官として入部し領主化したのではないかといわれている。西条市の高峠城が本拠で、山麓にある保国寺が菩提寺である。石川入道、石川信濃守、備中守通昌、四郎虎武、彦三などの人物が史上によく現れている。天正十三年（一五八五）小早川隆景の軍によって高峠城は落城した。

黒川氏

戦国時代周敷郡の領主・剣山城を本拠とした。天文年間対馬守通俊は浮穴郡小手ヶ滝城主戒能氏を攻めて戦死し、その子通堯は恨みをはらそうと大熊城を攻めたが失敗した。その子通博は河野氏の「御侍大将十八将」の一人に数えられ、河野氏の重臣として活躍した。

西園寺氏

鎌倉時代に公経きんつねが宇和郡地頭職を得て宇和荘に下向して土着したといわれている。有力領主に成長し、戦国時代には大名化している。松葉城、

黒瀬城などを本拠として南予地方一帯を支配した。戦国時代の末、公広の時には豊後の大友宗麟や土佐の長宗我部元親の侵略を受けた。天正十五年戸田勝隆に謀殺され断絶となった。

平岡氏

浮穴郡荏原周辺を支配した領主。天文・永禄期の房実のときが全盛時代である。房実は各地の合戦で軍功をあげ、河野氏の奉行人として活躍。

河野氏滅亡後は、子孫は毛利氏に仕え、大島郡和佐村に所領を与えられた。本拠であった荏原城趾は県指定の史蹟である。

正岡氏

風早郡正岡郷から越智郡に本拠を移した。経政は河野氏の重臣として戦功をあげた。大永三年（一五二二）経貞は河野氏に叛した。天正十五年

河野氏が竹原に退去の節は隨行した。

村上氏

芸予諸島海域とする海賊衆。系譜については諸説あって定かでない。南北朝のころ義弘のころから活躍が著しい。河野氏と征西將軍宮懷良親王の面会を実現させた。室町・戦国時代に、能島・来島・因島の三村上に分かれた。来島村上氏は、通康の時に信長、ついで秀吉の支配下にはいり豊後国森、一万石の大名となった。

和田氏

久米郡志津川地域を支配した領主。古くは志津川氏とも称したという。岩伽羅城を本拠とし戦国時代は河野氏の重臣として活躍、通運は河野氏に叛して滅ぼされたが、天正期通勝の時復帰し軍功をあげた。河野氏竹原に退去の節には従っている。

今岡氏

南北朝時代から戦国時代にかけて芸予諸島で活動した海賊衆。南北朝時代の通任は貞治四年（一三六五）、細川氏との争いに敗れた河野通堯を村上義弘とともに九州の懷良親王のもとに送り届ける役をはたした。応永年間には越智郡

大島での海賊行為を幕府から非難されている。室町時代以降河野氏の家臣団に入り、水軍の一翼を担った。戦国時代、民部大輔は「御侍大将十八将」の一人に数えられている。

宇都宮氏

下野国宇都宮郷を本貫とする豪族。鎌倉時代に頼綱が伊予守護職に任じられ一族が入部し、その子孫は喜多郡に土着した。南北朝期、貞泰は室町幕府の有力御家人で大洲市西禅寺に置文を残している。戦国時代の豊綱は地藏嶽城に拠って喜多郡一帯に勢力を張った。河野氏との戦いに敗れて備後国三原に追われたという。

大野氏

出自は不詳、室町・戦国時代の領主である。浮穴郡大除城（久万町）を拠点として大きな勢力を有した。天文期に利直は戒能氏の小手ヶ滝城・大熊城（川内町）を攻めたが失敗した。利直・直昌なおしげは河野氏の重臣として長宗我部氏や三好氏との戦いに軍功があった。直之は宇都宮氏を追放して喜多郡地藏嶽城主となった。

忽那氏

平安時代末から戦国時代には風早郡忽那島の領主。存在の確認される最初の人物は、平安末期に忽那島長講堂領を寄進した俊平。鎌倉時代には御家人の地位につき、將軍より忽那島地頭職を補任せられる。元弘の変が起こると、土居・得能氏らと共に反幕府行動をとり、南予の宇都宮氏を攻めた。南北朝時代、義範は征西將軍懷良親王を島に迎え、瀬戸内海各地で活躍した。室町・戦国期、河野氏の家臣団に入り、通著は「御侍大将十八将」の一人となった。

土居氏

河野氏の支族で久米郡石井郷土居（松山市）を本拠とした。通増は南朝方の武士として活躍、伊予国内で守護宇都宮氏と戦うと同時に、のち新田義貞の軍に属して足利方と戦った。延元元年（一三三六）越前国で戦死・その子孫は河野氏の被官となり、通周や通建は河野氏の重臣として活躍した。

重見氏

河野氏の支族得能氏の出といわれ、越智郡明神山城（今治市石井）と風早郡日高城（北条市中村）を拠城とした。室町期の通実は、河野氏が本宗家の教通と庶家の通春に分裂した時、教通方についた。戦国期の通昭は奉行人として活躍。子孫には享祿三年（一五三〇）河野氏に叛いた通種、河野家臣団に復帰した通次、通俊らがいる。

年 譜

西 曆	和 曆	干 支	事 項
一五一九	永正一六	己卯	河野通直来島城で病死、その子通直が跡を継ぐ。
二二	大永二	壬午	安芸の兵大三島を襲撃、重見・来島・正岡氏ら防戦する。
二六	六	丙戌	河野通直・善応寺の寺領を安堵する。
三九	天文八	己亥	河野通直、幕府の相伴衆に加えられる。長宗我部元親誕生、幼名弥三郎。
四〇	九	庚子	大内義隆の家臣、中島を侵略す。
四一	一〇	辛丑	大内義隆の家臣、大三島を襲撃する。
四九	一八	己酉	長宗我部国親、山田氏を討ち付近の豪族を帰服さす。
五一	二〇	辛亥	石川通昌、金子十郎に新居郡宇高などの所領を与える。
五三	二二	癸丑	大野利直、大熊山城を攻める。

七六	四	丙子	1・	元親伊予南部に出兵。元親阿波の白地を奪取し、香宗 る。
七七	五	丁丑	1・23	我部親泰を軍伐にする。 足利義昭、入京しようとして河野通直に援けを求め 久武親信南予の軍伐となり宇和・喜多両郡を侵略す。
七八	六	戊寅	7・5	元親讃岐に侵入藤目城を占領。 河野通直能島、村上武吉らの水軍毛利輝元の軍に従 て尼子勝久らを討つ。
七九	七	乙卯	4・15	大野直之河野通直の派遣した忽那、土居らの軍を破る。 石川・金子氏ら元親軍の先鋒となり羽床城を攻める。
八〇	八	庚辰	1・	安土城完成信長入城。大友軍日振島を襲う。 大野直之元親に内応する。
八一	九	辛巳	1・7	三滝城主北之川通安元親に滅さる。西園寺公広の黒瀬 城元親軍に滅さる。 河野通直吉見広頼の女を娶る。
			4・	

西曆	和曆	干支	事
八二	一〇	壬午	7・21 元親金子元宅と盟約する。
八三	一一	癸未	8・28 元親三好存保を中富川で撃破、元親岩倉城を奪い東讃岐に兵を進める。
八四	一二	甲申	6・2 本能寺の変
八五	一三	乙酉	山崎の戦い光秀破れる。 太閤検地 元親讃岐引田に仙石秀久を襲撃。 大坂城を築城。 元親の兵穴戸元孝と恵良に戦う。紀州根来寺元親に通ず。 黒瀬城陥落。 毛利輝元、秀吉の要請で伊予出陣を陣触す。 元親金子元宅と覚書を交換する。 秀吉、伊予国を隆景に与えることを約す。

八七	八六					
一五	一四					
丁亥	丙戌					
7 ・ 14	7 ・ 9	10 ・	9 ・	8 ・ 6	7 ・ 29	6 ・ 27
通直竹原にて病死（二十四歳）河野氏断絶。	河野通直湯築城を去る。	秀吉の命により元親・信親父子九州に出兵。信親戦死。	元親上坂して秀吉に年賀の儀を修む。	河野通直隆景に降伏する。	秀吉元親を降す。	隆景ら道後に侵入湯築城を攻める。 卷する。

参 考 文 献

- 土佐国蠹簡集（奥宮正明編）
- 元親記（高島孫右衛門著）
- 土佐物語（吉岡孝世著）
- 四国軍記（土佐軍記）
- 南海通記（南海治乱記）（香西成資著）
- 南国市史（南国市史編纂委員会編）
- 高知県の歴史（福井好行著）
- 徳島県の歴史（市原輝士・山本大著）
- 愛媛県の歴史（田中歳雄著）
- 伊予史精義（景浦稚桃著）
- 長宗我部元親（山本大著）
- 長宗我部元親のすべて（山本大著）
- 戦国合戦事典（小和田哲男著）
- 予陽河野家譜（校訂景浦勉）
- 河野氏の研究（景浦勉著）
- 築山本河野家譜（景浦勉編）
- 郷土歴史人物事典愛媛（景浦勉編）
- 日本城郭事典（大類伸監修）
- その 他

あとがき

湯築城主河野通直は伊予の名族であった。その河野氏は源平時代から鎌倉・南北朝時代にかけては史上に花を咲かせたものであったが、戦国時代になると讃岐の細川氏の侵入に脅かされた。次いで土佐の長宗我部元親軍の侵攻に翻弄され、その揚げ句に秀吉の四国征伐によって滅亡させられたのである。

そこで、伊予戦国衰史を書いてみようと思ひ立ち、河野氏を取り巻く周辺の群雄たちの動静を調べていると、長宗我部元親については今まで知らなかった人物像を発見したのである。それは戦国武将としては珍しく人間味の溢れた温かい人物であったということである。

武骨一点振りの武将だと思っていた元親が四国制覇の軍を起こしてより十年。この長い

年月にわたって一人の離反者も出さず、ここまで将兵を引っ張って来れたことは驚きであるが、その陰には元親の温かい人間味が大きな魅力となっていたのであろう。元親は常に細心の気配りをし、戦功があった者には惜しげもなく領地を与え、戦いに疲れていると見れば直ちに軍を撤収して兵を休養させている。決して無理な力攻めはしていないのである。

さらに、『長宗我部氏掟書』などを見ると、元親の教養の深さや人間尊重の精神が満ち溢れていることを知ることができるのである。これこそ、戦国大名に相応しい人物といえるのである。

それに対して伊予の河野氏はどうであつたろうか。世継問題が原因となつて度々内訌が起こり次第に弱体化した。弾正少弼通直には嗣子がなかつたので、池原館の牛福丸（当時五歳）を迎えて宗家を継がせたものの、弱年である上に健康に恵まれていなかったため、この事が滅亡への致命傷となつたのである。

秀吉は四国征伐が終つたあとの戦後処理で、反抗を繰り返した長宗我部元親には土佐一国の領有を許しているのに、抵抗らしき抵抗もせず降伏した河野通直には領土没収追放

という冷酷な処分を行っているのである。これはどうしたことであろうか。思うに「毒にもならぬが薬にもならぬ領主は無用の長物」とばかりの現実主義的判断に立っての処分であったのだろう。さすがに秀吉である。天下取りの立場からの炯眼けいがんによったものであろうが、恐るべきことであった。

× × × × × × × ×

本書を纏めていく過程において、愛媛県立図書館、高知県立歴史民俗資料館、中村市立図書館、幡多郷土資料館その他の方々には格別にご高配ご指導をいただいたことを、ここに深甚の謝意を表するものである。

平成九年七月三十日

河野氏滅亡と周辺の武将たち

平成九年八月二十五日発行

著者 別府 頼雄

〒七九一〇二

住所 愛媛県温泉郡重信町野田一丁目二〇一―二

TEL (〇八九) 九六四―三四一七

印刷所 有限会社 有光印刷

<著者略歴>

大正5.2.24生. 昭和8. 国学館本科・
研究科卒. 小学校教諭・教頭・校長.
昭和50. 退職. 重信町教育委員・委員長.
文部大臣表彰. 徳威三嶋宮々司.
愛媛県神社庁参与. 重信町文化財
審議会委員. 重信史談会会長.
神宮評議員

<著書> 「重信のむかし話」(共著)
「教え子と共に」
「南北朝動乱と伊予の武将」